

文法の復権 (現代印欧語批判)

1) フランス語名詞のふたつの区分

フランス語の名詞にはふたつの区分（男性形・女性形）がある。イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、ルーマニア語など、フランス語と同じロマンス語（ラテン語から生じた言語）系の言語にもすべてこのふたつの名詞区分がある。ドイツ語は男性・女性・中性の3性がある。同じゲルマン語の英語も古くは3性だったが、現在その区分は代名詞あるいは指示詞的なものに、それも不完全にしか残っていない。現在の英語使用者はゲルマン語時代に3性を成り立たせた名詞の性についての感性をほとんど失っている。英語を知ってからフランス語を学び始める人にとって、2種の名詞の性に代名詞はもちろん、形容詞も応じるフランス語は、性の区分は外形的見分け方が明らかではないだけ、なかなか扱い方がむずかしい。

ある言語の構造とその言語を用いる人の心は深く関係している。その言語の文法とその国の昔の人々のものの感じ方、考え方は緊密に作用し合っている。文法を追究することは人の心を昔にさかのぼることに似ている。

フランス語を用いる人は無意識に名詞を二分している。フランス語のすべての名詞は男性形であるか、女性形であるかのどちらかである。しかし名詞を男性・女性と分ける明確な意味上の基準はない。フランス語を生み出したラテン語の名詞には、ドイツ語と同じように、男性、女性、中性の3種の性があった。そしてこの3性はもともと無生（中性）、有生の2種であったことが知られている。地上にあるものを、自分に関わりを持ち動くもの、生きている（と思われる）ものと、自分には関わりがなく、生命をもたない（と思われる）ものとに分けてしまう人々のように、昔のインド・ヨーロッパ人は事物を、魂のあるもの（有生）とそうではないもの（無生）とに分けていたらしい。ギリシャ語の前段階にあったと考えられている印欧語のヒッタイト語にはこうした原初的な、名の2分法があった。

有生のものはふつう雌雄の2種があるので、しだいに男性と女性に分かれる一方、本来の意味が忘れられてきた無生名詞は中性名詞になっていった。西洋古典語と言われるラテン語、ギリシャ語、サンスクリット語、ゴート語にある3性はこうした成り立ちである。ラテン語からフランス語に変わる途中で中性と男性の区別が曖昧になり、女性になった中性もあるものの、中性の多くは男性形になった。したがって、フランス語の男性名詞のなかには、もともと中性名詞であったものが数多く含まれている。

フランス語ほかのラテン系言語の男性、女性はこのような成り立ちである。ドイツ語では3性がまがりなりにも維持されているが、先に述べたように英語はこうした古い名詞の区別をほとんど失っている。以上を整理すると下のようになる。

有生	----	女性	----	女性
	---	男性	----	男性
無生	----	中性		

ある名詞が男性であるか女性であるかの実際的な区別は、意味より語尾によって目安がつく。たとえば *-e* で終わる名詞の大多数は女性であり、子音で終わるものの多くは男性である。*-ment*, *-age* といった語尾をもつ名詞は男性、*-ance* (*ence*), *-ion* といった語尾は女性。男性か女性か自分で仮説をたて辞書で確かめるとはやく名詞の性に慣れることができる。

père 父 (男性)、*mère* 母 (女性)、*gendre* 娘婿 (男性)、*bru* 嫁 (女性)、のように明らかに意味から見当が着く場合がある一方、*personne* 人 (女性)、*victime* 犠牲者 (女性)、*élite* エリート (女性)、のようになぜ? という場合も少なくない。

pomme りんご、*poire* なし、*pêche* 桃、*noix* くるみ、といった果実の多くは女性、*pommier* りんごの木、*poirier* なしの木、*pêcher* 桃の木、*noyer* くるみの木は男性というように意味上の目安 (*arbre* 木、は男性) となるものもないわけではない。しかし *dorade* 鯛 (女性)、*espadon* めかじき (男性) のように、*poisson* 魚 (男性) の場合はまちまちである。

2) 主体と客体

主体と客体は、言葉の始まりから存在するくらい古いと思われているふたつの文法概念である。いったい、主語すなわち行為者を欠く行為、あるいは状態を想像することができるだろうか。主語のない、動詞の意味だけを思い描くことはなかなかできない。子供用の動詞変化表では、動詞の変化はつねに適当な主語を伴ってあらわされる。「牧場で草を食む *paissent* のは牛のむれ」だったり、「空で輝いている *brille* のは太陽」だったり。

ときには実際に表されなくとも主語が何であるかわかる表現がある。*Viens!* 来て、は2人称単数の人に「来る」ことが要求され、*Venez!* 来て、は、「来る」ことが要請されているのは2人称の複数（単数の場合もある）である。

文の主語は文法上、なくてはならないものだろうか？そうではないことは非人称動詞と呼ばれているものがあることからわかる。「雨が降る」はフランス語では *Il pleut* という非人称の構文で言いあらわされるが、この表現には必ずしも *la pluie* 雨、という名詞が内示されているわけではない。

Il faut 必要だ、という表現は、必要とされているモノは言葉で示す必要があるが、何（あるいは誰）がそれを必要としているのか、という動詞の主体は表されなくともよい（その場合はふつう発話者が主体）。「雨が降る」とか「雪が降る」*Il neige*、あるいは「必要だ」という表現は、はっきりとした主体の明示を必要としないように見える。実際ここで問題となっているのは天候、その他の状態であって、主体を具えた状態や動作ではない。すなわちこれは主語があらかじめ内示、あるいは省略されているのもなく、その主語という概念自体まったく必要とされない状態なのだ。

古い印欧語であるサンスクリット語で「(彼は) 森へ行った」という意味を *Gatah vanam* と言う。ここで *gatah* は *gam* 行く、の過去分詞の単数男性形であり、*vanam* 森、は中性単数の主格形か対格形（ここでは方向を表す対格）である。誰が森に行ったのか、という、いわゆる動作の主体となるものを知るてがかりは、この過去分詞が単数の男性形であるということだけであり、人称を示すつなぎの動詞を必要としないので実は人称さえも

明確ではない。この文だけでは森へ行った人が「彼」ではなく、もしかしたら「お前」あるいは「私」であるのかも知れない。これをフランス語に直訳すると *Allé dans la forêt* というようなものになる。つまりここで伝えられている情報は「森に誰かが行った」ということだけであり、それが誰であるかはこの語句では伝えられない。ほぼ同じ意味は *Gatam vanam* (*vanam* 森、ここでは主格。それに他動詞としての *gam* 行く、の過去分詞が一致している) で表される。直訳すれば *Atteinte (est) la forêt* 森は到達された (誰か森に行った)、である。

この構文では誰が森に行ったかを示す手がかりはまったくない。この構文はほとんど受け身構文といってよい。*Gatah vanam* という構文でも主語表示があいまいな一方、目的対象ははっきり示されるので、目的語を主語に置換することで成り立つ受け身構文は容易に構築される。

これはつまり、主語を保証するものは文法装置ではなく文の前後関係、文法内ではなく文法外の条件によるということであり、また目的格は主格に優先していたことを示している。インド英語は客体を主体に置き換える受動態形式を多用することで知られているが、インド人はこうして、外国語を用いても、彼らの昔からの言語心理をそのなかに永続させている。現代印欧語構文では、文法上の「主語」が過度に要請された結果、人工的、能動的な主語性がすべてのコミュニケーションで本質的な要素にまで押し上げられてしまっている。

3) 名詞文 (並列文法から立体文法へ 1)

1) *Pouvoir, folie. Pouvoir absolu, folie absolue.*

権力・狂気、絶対権力・絶対狂気

2) *Homme seul, mauvaise compagnie.*

一人でいる人・悪い仲間

3) *Blonde, innocence.*

金髪女性・無邪気 (ミシェル・トゥルニエ『金のしずく』より)

名詞文とは名詞を並べただけの最も単純な構文のことだが、その意味は意外に深い。非印欧語、および古典語で頻用されるこの簡潔な構文が、言語表現に時空を超えた次元を与えていることはよく知られている。*Celle-ci est blonde.* この女は金髪だ、と *celle-ci* で指示され、つながりの動詞 (*être*) をもつような文では、女の髪の毛が金髪であるということが現在形の動詞で繋がれている分、空間的にも時間的にも具体的にイメージされる。しかし 3) の、イブン・アル・フーダイダの金言「金髪女性・無邪気」では、金髪女性と無邪気との関係はそのような具体性を欠き、分かりにくい。

「クレタ (は) 島」という名詞文で表される同格の観念はあらゆる時代の地中海人の心に定着している。一方「クレタは島である」という、ふたつの名詞の関係をわざわざ繫辞動詞 (*be* 動詞) でつないだ文は、歴史や地理を語る人、また教師のような人たちが (ギリシャは半島だが、クレタ島は島だ、というように) 意味を限定、明確化するために用いる形式である。

さて名詞文と動詞使用文の違いを別の観点から検討してみるとどうなるだろうか。

1) のアランによる文の前半は「権力は狂気 (をつくる、をなす、である)」と動詞を補ってみることができる。原因が「権力」、結果が「狂気」というわけだ。しかし、これは最初の要因、つまり「権力」と「狂気」というふたつの観念の関係についての一つの仮説的解釈にすぎない。この名詞文はふたつの名詞的要素が単に並べられている状態であり、この並列状

態はまさにこれらふたつの要因が因果関係、つまり論理的順序で解釈されてしまうことを拒絶している形式かもしれないのだ。したがって「権力、狂気」という一つの組み合わせを「権力は気違いをつくりだす」とか、「権力は狂気である」と断定して一方的に解釈することはできない。もしかしたらアクセントは第 2 要素に置かれていて、「狂気（こそ）権力（そのもの）」ということかもしれないのだから。

2) のゲーテの言葉とされている文は、ゲーテの真意は何であれ、「ひとりである人間は（いつも）悪い仲間（と一緒にいるようなものだ）」というふうにもとれる。これにならって 1) の文は「権力（者はつねに）狂人（のそばにいる）」という解釈も可能だ。権力、狂気を逆転して、「狂気・狂人はつねに権力のそばにある」ともとれる。こうなると権力にたやすく接近できるのは狂人ということにもなり、「権力を牛耳るものは狂気」という理解もへりくつというわけではなくなるだろう。そうすると原因は狂気、結果が権力、つまり「狂気は権力を生む」という意味にもなっていく。「権力は狂気を生む」のではなく、「狂気が権力を生む」ということだ。したがって（権力、狂気）と並べられたものを、「権力が狂気を生む」という意味に敷衍することはすこし早まったことかもしれないのである。

現代印欧語は言述の論理性、明晰性を気にしすぎ、名詞文がもともと持っていたせつかくの曖昧性を振り払ってしまった観がある。インドのサンスクリット語はもちろんのこと、古いギリシャ語、ラテン語などでも名詞文は豊富に、効果的に用いられていた。現代のアラビア語、日本語などには be 動詞にあたる繫辞動詞はないが、現代語を用いる多くの人の感性はこうした名詞文の可能性を必要としなくなった結果、古い言語や非印欧語を豊かなものにしてきた言葉の力を失ってしまったように見える。

4) 形容詞から名詞へ

フランス語では形容詞と名詞との形態上の区別は必ずしもはっきりしていない。Un riche et un pauvre 金持ちと貧乏人、は un (homme) riche et un (homme) pauvre 金持ちの人と貧乏な人、であり、les riches 金持連中、とは les (gens) riches 金持の人たち、les misérables みじめな人々、とは les (gens) misérables みじめな人たち、のことである。ふつうフランス語では形容詞は修飾詞にも実詞（名詞）にもなる。

一方、名詞が形容詞の役目を果たすこともある。bureau ministre 大臣机と呼ばれるものは、大臣 ministre が使うような大きな立派な机を指す。ふだんは実詞である ministre という語がここでは名詞ではなく修飾詞として用いられているのであり、このような例は roman-fleuve 大河小説、poisson-chat なまず、mot-clé キーワード、mot-fonction 機能語、cas-sujet /cas-régime 主格 / 対格（被制格とも言う）、など数えきれない。こういう場合、語の2番目の部分が形容詞の役目をする。science-fiction サイエンス・フィクション、という語があるが、これは英語からの借用で、フランス語として解されると「フィクションとしての科学」というような意味になる。

こうした語の第2要素として固有名詞が頻用される。Place Notre Dame ノートルダム広場、Musée Guimet ギメ美術館、Tour Eiffel エッフェル塔、Aéroport Charles de Gaulle ドゴール空港、Centre Pompidou ポンピドーセンター、など。Hôtel-Dieu 市立病院（「神の家」が原義）はこの種の古い表現である。

ところでこの語のふたつの要素のうち最初のもものが省略される、ということがしばしばおこる。Le Notre Dame ノートルダム、という名の喫茶店は、実際は Le (café) Notre Dame。この祭りが行われる11月のはじめころの暖かい日よりを言う L'été de la St Martin マルタン祭の夏(小春日和)、という表現のなかの La Saint-Martin サン・マルタン(祭)、は La (fête) St Martin マルタン聖人の祭り、のことである。A la française フランス式に、とは A la (manière) française フランス方式で。こうした表現では言わずもがなの名詞は省かれる。

こうして名詞が省かれると残った形容詞が名詞の様相をおびる。La capitale 首都、は la (ville) capitale 主なる都。Le principal 校長、は le (maître) principal 主席教師、la marine 海軍 / 航海術、は l'(armée) marine / la (navigation) marine 海軍 / 航海術、le quotidien 日刊、は le (journal) quotidien 日刊 (新聞)。Les présidentielles = les (élections) présidentielles 大統領選挙 ...。Le menu (détail)メニュー、では détail 内容、という後置された名詞が消えている。menu (細かい、詳細な) という形容詞は名詞に前置されているからだが、こうした例はまれである。

名詞が省略された結果、l'échapper belle 危うく逃れる、en avoir de bonnes 冗談を言う、というような表現において、この形容詞がなぜ女性形であるのかわからなくなる。主要な名詞が忘れられた語では、その性の理由を残された語そのものに求めても無駄である。La présidentielle 大統領選、は、この語自体として女性形である必要はまったくない。消えてしまった élection 選挙、という語が女性だったのだ。

こうして、最初は2つの部分から成り、そのうちの主要な方を失いながら、その失われた方の性の外見を残った方が維持している、というような語は実はたくさんある。名詞の多くはもともと比喩的なもの、形容詞的なものであったに違いないが、その性の理由を、残った方の形容詞の意味に求めても無駄なのである。

5) 副詞

形容詞は名詞に関係する。副詞が関係するのは、形容詞、別の副詞、および動詞である。副詞は修飾する形容詞及び他の副詞の意味を多少変えるだけだが、動詞に関わるときはかなりむずかしい解釈をしなければならないことがある。動詞には人称、法、時制、態などがあり、またそれらに応じた変化形をもっていて、それ自体、きわめて複雑な現象だからだ。

動詞は単に動作や状態をあらわす語ではない。百年ほど前のフランスの言語学者ミシェル・ブレアルは「動詞とは、ギリシャ人によれば、(名詞のような) 格をあらわす形はとくにないが、時、態、人称などをあらわす特別な形を持つと同時に、*les dispositions de l'âme* 気分、をあらわす品詞である」(『意味論試論』巻末の「動詞の起源」1897) と述べている。

フランス語の動詞はギリシャ語に比べてはるかに単純化されているが、本質的には同じである。さてブレアルが強調しているこの「気分」とは一体何か。

ブレアルは動詞の本質的な働きはこの気分、魂のありさま、をあらわすことにあると考えているようである。動詞はまた、ブレアルによれば、ふたつのことをあらわしている。行為の過程とその心情である。

ところでこの「気分・心情」とは、動詞組織のなかでどのように表現されているのだろうか。それは **mode** 法、によってあらわされると彼は考えるのである。ブレアルはまさにこの命令法、接続法、条件法あるいは直説法といった「法」のなかに、動詞固有の性格をつくりだしているものがあると見ているのだ。

さて副詞は動詞のこうした複雑な側面とどのように関わっているのだろうか。

「接続法」は行為や状態の具体的な観念のほかに、その行為や状態に付随する、あるいはもととなっている話し手の祈願、願望、呪詛といった心の内部をあらわすことができる。副詞はまさにこうした心の状態に関係している品詞なのである。

Dans l'avion, j'ai eu un malaise. Mais heureusement, à bord, mon voisin qui était médecin a pu faire tout ce qu'il fallait.

機中で私は気分が悪くなったが、幸いにして私の隣の人は医者で、必要なことをすべてしてくれた

この文中、**heureusement** という副詞は、単にここの主動詞 **a pu faire** (...してくれた) にかかっているのではなく、文全体 (隣人の医者が必要なことをしてくれた) に関係していることは明らかである。**L'affaire s'est terminée heureusement** (事態はまるく収まった) というように、動詞の種類によっては **heureusement** が動詞だけにかかっているように見えることもあるが、ここはこうした緊急時に、機中の、それも隣の客が医者だったこと自体「幸い」だったと言葉の主は言いたいのである。**heureusement** という副詞は、ここの文章の後半部分すべてにかかっている。この副詞が表しているものは話し手の、喜んで感謝している気持ちに直接関わっている。

副詞的表現を子細に調べてみると、副詞が話者の気持ちを表している用法は思ったより多いことがわかる。すなわち、単に副詞と呼ばれているもののなかには、優に一文に相当する、独立した副詞の範疇があるのである。現在、動詞や形容詞や他の副詞に従属して目立たなく見える副詞が、時代をさかのぼればさかのぼるほど、そのような他の品詞のくびきから自由になっている姿が見られるのである。外国語使用の上手な人は、こうした副詞の使い方の上手な人である。

6) 語・文 (Mot-Phrase)

Mot-Phrase 語・文、とは、*Le Bon Usage* 『慣用法』の著者グレヴィス (ベルギー人 1895 - 1980) によれば、文の代わりをするような一語、あるいはまとまった語句のことである。Attention! 気をつけて、とか、Merci, ありがとう、Mince alors! ちくしょう、Comment? なんですか、Certes non! ぜったい違う、Peut-être おそらく、などという表現がその例である。それぞれの語、あるいは言い回しは一文を形成しているわけではないが、そのはたらきはひとつの文のはたらきと同等だ。

これらの語は副詞、あるいは副詞句として分類することができるが、前に述べたように、副詞は言述を支えている気持、すなわち高度に主観的な部分に関わる場合がある。この「主観的な部分」は、動詞のこみいった組織、あるいは微妙な文脈のなかで成り立ち、表現される。このような場合、この「語・文」はどのようなはたらきをするのだろうか。

「語・文」とは、ふつう考えられるように、本来これより長い語群から省略され残った大事な部分というわけではない。Attention, une voiture! あぶない、車! は、Faites attention, une voiture passe! 注意しなさい、車が通る! というような、これより完全な表現の骨組みだけ、というわけではない。逆に言うと、Faites attention, une voiture passe という文は、Attention, une voiture に、Faites とか passe といった無用な言葉を補充し、膨らませた不自然な文である。

Merci ありがとう、は Je vous en remercie. そのこと私はあなたにありがとうと思います、のような文の簡略形というわけではない。Au feu! 火事だ! は Faites attention au feu! の省略形ではない。

大多数の「語・文」の意味は、副詞的なものである。しかしだからといって、この語句が副詞だというわけではない。attention 注意、とか、merci 感謝、というのは、それ自体は単なる名詞である。しかしよく知られていることだが同じ語が文章上、名詞のはたらきをしたり、副詞のはたらきをしたりすることがしばしばある。

例えばギリシャ語 *étumon* には「本当の意味、語源」という名詞と、「じっさいに、ほんとうに」という副詞が同居している。サンスクリット語

vanam, naktam にはそれぞれ、森（主・対格）、森へ、夜（主・対格）、夜に、というはたらきの異なる2品詞が内在している。フランス語では、例えば、habiter rue de Champagne シャンパーニュ街（に）住む、のように、名詞 rue をむき出しにして副詞的に用いる。フランス語の dormir la nuit 夜眠る、では la nuit に前置詞が不要だが、日本語でも「夜眠る」の「夜」は助詞（に）が不要である。

このフランス語の2例のように、ある種の名詞（特に、場所や時に関する語）は、文章上、名詞と副詞双方の役目を果たすことが知られている。このような2品詞兼用は、場所や時を表す名詞とは限らない。

ガスコーニュ語で書かれた『青ひげ』（ペローの同名のおとぎ話とはかなり違う）には、殺された女たちが吊るされている小部屋を開くための呪われた鍵が出てくる。この鍵をうっかり血溜まりの中に落として付いた血のシミは、こすってもこすっても消えない。それどころかますますシミがくつきりと浮かび上がる。このとき語り手は、Malaür (= Malheur) 不幸！と名詞そのもので言うのである。この簡潔な表現には、Malheureusement 不幸にも、とか、Par malheur 不幸にして、といった副詞による説明的な言い方より、はるかに力強い意味の広がりや喚起力があることがわかる。

Malheur！不幸！という言い方は、陰惨なその場を表すのみならず、そこにまで至った経緯と、その結果招来される暗い未来を聞く人に思わせる。この名詞は一連の行為、さらにはこの物語そのものを凝縮している。一方、「不幸にも、不幸なことに」という表現は語り手の深い感慨に根ざしているとしても、語られているのは今の事態、その場限りの現状にかかわるだけである。

時間的厚みと喚起力において、こうした名詞の力に比肩できるものは動詞しかない。

7) 命令法

命令法とは命令をあらわす動詞の法（モード）のことだが、命令のみならず、督励、勧告、祈りや禁止を表現することができる。こうした命令法があらわす意味は、ふつう、動詞だけではなく、動詞を用いない表現によっても伝えることができる。

Au poteau!（絞首刑にしてしまえ）、**Debout!**（起立）、**Assis!**（着席）、**Vite ici !**、（早くここへ来い）！、**Halte !**（止まれ）、**Doucement!**（落ち着け）

こうした表現は、必ずしも必要な動詞の形が省略されたもの、というわけではない。（*Qu'il aille*） **au poteau !** こいつは絞首台に（行くべし）、とか（*Qu'on l'emmène*） **au poteau !** こいつを絞首台に（連れて行け）、という、かっこで示した表現は無用な付け足しである。「命令法」とはしたがって、原則的に動詞の形を用いた表現と限定される。

それでは非動詞表現と動詞表現とのあいだにはどんな違いがあるのだろうか。すぐ気付くことは、非動詞表現はその命令の力を、その用語自体ではなく、言葉以外の要素、つまり声色、抑揚、しゃべり方、さらには動作とか顔色といったものから汲み取っているということである。

副詞の **debout** 起立（して）、という語それ自体には命令の観念はまったくない。これに対し動詞表現（*Levez-vous !*）においては、命令の観念はすべて動詞の構造のなかに組み込まれ、その枠組みによって言い表される。動詞は単に行為や状態を客観的に述べるだけではなく、モード、すなわち話し手の気持を表すことができるからである。

Ainsi est-il. このようである、と *Ainsi soit-il.* このようであればよいが、は双方とも同じ語（動詞 *ainsi être*）を用いながら動詞の使用されるモード（気分）が違うので、ここでは正反対のことを表している。命令法は接続法同様、動詞活用が表現するこうした主観的な側面に関係している。

古典語の動詞には、動作の過程や状態を表すだけでなくこうした語り手の気持を表現するために、ラテン語では接続法、ギリシャ語では接続法や

希求法、サンスクリット語ではそれ以上の種類の特別な活用体系があった。

ブレアルは『意味論試論』のなかで、動詞の意味するもっとも本質的な部分を「指示・命令」と「実行」という、ふたつの始源的モードに分け、次のように例示している。

(Commandement 指示・命令)

Accourez. かけつけろ

Préparez vos armes. 武器を準備しろ

Aime-moi. 私をだいじにきなさい

Dieux, protégez-nous. 神よ、われらを守れ

(Accomplissement 実行)

Nous accourons. 我らはかけつける。

Les armes sont prêtes. 武器は準備できた

Je t'aime. お前をだいじにする

Les Dieux nous protègent. 神は我らを守る

こうして言述の半分に関係し、それを支配する命令法は、この 19 世紀末の言語学者によれば、もっとも古い文法モードのひとつということになる。

実際、言語コミュニケーションにおいて、願望、祈り、あるいは命令を表現する気持は、完了したことを確認して伝える気持よりはるかに強く、うむを言わせないものである。命令法とは、したがって、この始源的な法（モード）および他のもっと洗練されたモード、例えばサンスクリット語やギリシャ語にある祈請法、祈願法、希求法あるいは接続法といったモードの根底を成している古い人間の気持を、文法の枠のなかでもっとも直接的に表現する方法であると言える。

8) 「反復」の文法機能

ドイツ語の *einmaligkeit* (*einmal* 一回、唯一の)「一回性」に対応するフランス語の名詞は見あたらない。*Unicité* (*unique* 唯一の、単一の) という語があるが、*einmaligkeit* の意味と同じではない。このドイツ語は歴史の「一回性」などというときに用いられる。

すべての行為は一回のみか繰り返されるかである。「きのうあの人が私のところにやって来た」*Hier, il est venu chez moi.* と「あの人は私のところにしょっちゅう来た」*Souvent, il est venu chez moi.* というふたつの表現において、共通部分 (*il est venu chez moi*) の一方は一回性、他方は「繰り返し」を表している。

しかし *venir* 来る、ではなく、*naître* 生まれる、とか *mourir* 死ぬ、という事態は人にはふつう一回しか起こらない。

Vendredi matin, Mme Ferrars mourut. 金曜日の朝、フェラーズ夫人が死んだ。(アガサ・クリスチー『アクロイド氏殺人事件』より)

この事態はこれっきりであり、遡及されたり繰り返されることはない。*Mme Ferrars mourait (se mourait).* フェラーズ夫人は死の床についていた、という半過去の文は可能だが、この半過去の意味は繰り返しではなく継続状態である。夫人はまだ死んでいない。ここでは事態の持続的側面が強調されている。「死ぬ」ことはある事態の決定的な停止をあらわす。歴史はこうした一回だけの事態から成り立っている。

動詞 *fréquenter* 通う、は、同じ行為の反復をあらわす。*Adolescente, elle a fréquenté l'école Sainte-Marie.* 少女のころ、彼女はサント・マリー校に通った、という文は無数の往復行為を前提にしている。*grelotter* (寒くて) 震える、*sautiller* ぴよんぴよん飛び跳ねる、*chantonner* 鼻唄を歌う、などというのはいくつかの小さな行為の繰り返しである。*Longtemps, elle grelotta.* 長い間、彼女は震えた、という文は十分可能である。しかし **Longtemps, elle mourut.* 長い間、彼女は死んだ、という文は不可能である。*Les soldats tombèrent les uns après les autres.* 兵士は次々に倒れた、というよ

うな表現はありうるが、兵士一人一人に関しては「倒れる」行為は一回きりであり、反復ではない。

しかし今みたとおりに、「一回性」と「反復」は大部分の動詞では両方も表すことが可能だ。プルーストは『失われた時を求めて』の冒頭で、このふたつの可能性のなかのひとつをうまく利用した。

Longtemps, je me suis couché de bonne heure.

長いあいだ、私は（夜）早く寝たものでした。

ここでは早寝の習慣（つまり反復行為）が、読者にとって親しげな口調（複合過去）で表示されている。語り手にとってはすでに過ぎ去った時を切り取ったようなこの冒頭は、たいした事件の起こらないこの小説世界に独特のトーンを与えることに成功した。

ふつう一回きりのことを書き言葉で示す単純過去は、歴史を叙述するのにもっとも適した時制であるとみなされているが、この単純過去も複合過去同様、繰り返されたことに用いることができる。『失われた時を求めて』の冒頭は、**Longtemps, je me couchai de bonne heure.** と言っても意味上は変わらない。Je「私」に単純過去を用いることは、バンヴェニストなどによれば、語りの技法上いくらか問題があるが、プルーストはあえて je に単純過去を用い、ある情景描写の副題とした箇所がある。

Je dînai avec Legrandin sur sa terrasse.

私はルグランダンのテラスで彼と夕食をとった。

（『スワン家の方』旧プレイヤー版第1巻127ページ）

一回きりのことはもちろん、反復された行為でも結局はひとつのまとまりとなってしまうので、一回性をあらわす単純過去あるいは複合過去で表現できるのである。そもそも「文法」とは歴史と同様、無数のかけがえない一回だけの事態をつらぬいている反復性を求める科学ではないだろうか。

9) 語順

文法上の方法としての「語順」は、言葉のはじめからきちんと決まっていたのではない。文法の方法としての語順は比較的最近獲得されたものである。サンスクリット語を含め、西洋古典語には名詞が主語であるか目的語であるかを示す格変化があり、現在「語順」で表されるものを表していた。

Imperator cum exercitu profectus est というラテン語の文章は、現在のフランス語では、*Le consul est parti avec l'armée*. 将軍は軍と共に出発した、と表される。

これを *Avec l'armée, le général est parti*. と訳すことも可能だ。 *Avec l'armée il est parti, le général*. または *Avec l'armée est parti le général*. といった翻訳も場合によっては十分可能である。しかしふたつの要素、すなわち *est parti* をひっくり返して言うことはできない。 *Le général parti est*. とか *Parti est le général*. という構文は現代フランス語ではない。

ラテン語で「語順」とは文法上の必要条件ではなく、むしろ文体上の問題であった。ある名詞が主語であるか補語であるかは、語順ではなくしかじかの格語尾によって見分けられていた。

Paulus Petrum interrogat. パウルスがペトルスに訊く (フランス語では *Paul interroge Pierre*.) というラテン語の文章においては、*-(u)s* という主格をあらわす文法上のしるしに保証されている語 *Paulus* は、文のどんな場所に位置することも可能であった。 *Interrogat Paulus Petrum*. でも、 *Interrogat Petrum Paulus*. でも、ラテン語では後置された語のほうに文の力点が置かれる、ということはあるが、意味全体が変わってしまうということはなかった。

このようにラテン語では、主語の位置に関しては、主語 *Paulus* は対格 *Petrum* と位置の交替は可能だったが、そのような交替が現代フランス語で起きたら、重大な誤解が生じてしまう。フランス語 *Pierre interroge Paul*. では、ペトルスがパウルスを尋問することになるからだ。フランス語で動詞の前に置かれた名詞と後置された名詞がある場合、ふつう、前置されたものが主語になる。

「語順」の発生については、格変化が消滅したから語順の固定化が必要とされたのか、語順の固定度が発達してきたので格変化の消滅がはやまったのか、ということがずいぶん議論された。しかしこれはふたつの考えとも正しかったと思われる。つまり、このふたつの便法それぞれ一方が他方の原因にもなり、結果にもなっていたということである。

ひとつのことを言いたいときに、ふたつの方法がある場合、そのふたつとも用いる必要はない。その一方を用い、もう一方は用いなくてもよい。しかし多少なりと公的性格をおびた定式化した文章では、長い間、語順だけではメッセージの理解に不安があるように感じられていたらしい。中世の言語で、アクセントを移動することにより主語の形と補語の形を違えた、1語2形制度が存続したのはこのせいだと考えられている。

普通名詞では現在の *enfant* に対し、中世では *enfes* (主格) と *enfant* (目的格)、*garçon* に対して *gars* [ga] (主格) と *garçon* (目的格) があった。ふつう存続したのは目的格の方だが、主格も *gars* のように *garçon* とはすこし意味を違えて残ったものもある。

固有名詞では *Jacques* (主格) / *Jacque, Jacquon* (目的格)、*Hugues* (南仏語 *Huc*) / *Hugo(n)*, *Charles* / *Charle, Charlon*, *Georges* / *George, Georgeon* などがある。語順の固定化がはやくから行われた英語ではフランス語のような格語尾の観念がうすく、*Charles* は残ったが、*Georges* の *-s* は消え *George* となった。フランス語の人名で主格形は消えなかったのは、公式文書で主語として用いられる場合が多かったからである。

現代語では語順は厳密になり、アラビア記数法での個々の数字の位どり位置に似た意味を持ち始めている。

10) 倒置と疑問

前項で見た通りフランス語の語順は比較的自由だ。英語より自由だが、ラテン語ほどではない。英語では、いくつかの代名詞をのぞいては格変化をする語はほとんどなくなったのに対し、ラテン語は基本的に屈折言語（語尾変化をする言語）なので、コミュニケーションを成り立たせるために、定まった語順を必要としない。主語は、強調されているかどうかによって、文の前、真ん中、後のどこでも置くことができる。

その語を強調するのか、緩和するのか、あるいは強調も緩和もされないふつうの語調なのか、こうしたものが言述のなかでの語の位置を決める要因となる。フランス語はどちらかと言えば語順の厳密な英語よりは、語順の自由なラテン語に似ている。

フランス語では「主語・述語」という順序は一般的な規則として確立されているわけではない。それどころか主語と述語を逆に置く、「倒置」がこの言語の特徴のひとつであるということができる。

Les arbres que la tempête avait abattus 嵐になぎ倒された木々, という表現は、*les arbres qu'avait abattus la tempête* と言い表しても表現力を失うというわけではない。失うよりもむしろ、音節の数がひとつ減るといって、文構成上の得点がある。

音を減らすことだけが重要なら、これを *les arbres abattus par la tempête* と、もっと短縮できる。しかしこの場合、意味はほぼ同じだとしても、関係代名詞 (*que*) や、時と人称に応じて活用されていた助動詞としての *avait* を欠いた分、動きと時間の観念がぼけ、明晰さがうすれる。さらに、他動詞として用いられていた *abattre* なぎ倒す、が過去分詞として受動的意味に用いられ、「木、嵐、なぎ倒す」のあいだの関係が、動的な観点より、「完了」という静的な視点からの表現に変わる。

Aussi (だから), *tant*, *tel*, *ainsi*, *sans doute*, *à peine*, *peut-être*, *tout au plus*, *tout au moins* などと言った副詞的語句が文頭に用いられると、よく主語と述語が倒置される。

Telle était ma devise. これが私の信条だった、Ainsi dit-il. このように彼は言った、A peine fut-il arrivé, 彼は着くや否や、Peut-être était-il que ...おそろくこうだった、D'où vient sa folie. 彼の狂気はそこから生じている、Pour lui primait avant tout la foi. 彼にとって大事なものはまず信仰であった、などという言い方ではすべて、副詞（的表現）が前置されている。

副詞（的表現）が文頭に置かれると、その次に名詞ではなく動詞がくるのは、副詞・動詞のつながりのほうが副詞・名詞のつながりよりも強いからである。

Rare まれな、nombreux 数多い、heureux 幸せな、というような形容詞も文頭に置かれるとよく倒置構文が生じる。Rares, nombreux, heureux sont ceux qui ...、...のような人はまれだ、多い、幸せだ、という表現は、古いフランス語の伝統を汲む格調高い構文である。「狭き門より入れ」という聖書の文句の後半「なぜなら、滅びに至る道は広く大きい」は *Car, spacieux et large est le chemin qui mène à la perdition.* と倒置され全体のバランスをとる。グレヴィスの *Le Bon Usage* には、「中世語では、動詞を2番目の位置に置くという、かなりはっきりとした傾向があった。したがって文章が副詞あるいは補語ではじまると、主語はふつう後置された」とある。

倒置とは言述を緩和したり、バランスをとったり、強めたりする方法である。倒置によって疑問も表現されることがあるが、疑問の観念は倒置によって生じる当然の結果の一つであった。

ギリシャ語の小辞 *ê* はときにはフランス語の強調辞 *certes* たしかに、また場合によっては疑問表現の *est-ce que ...?* に相当するが、疑問と強調とが同じ方法で表現されることはきわめて自然なことだ。

11) 他動詞の発生と受身構文

自動詞と他動詞の区別はもともと存在していたものではない。ミシェル・ブレアルは『意味論試論』に *La force transitive* 「他動の力」(第20章)を掲げ、この「他動の力」というものが、本来自動詞とも他動詞とも分けられていなかった動詞のあるものの中からいかにして生じて来たかを説明している。

Vanam gachâmi (= *je vais dans la forêt*. 私は森へ行く) というヴェーダ・サンスクリット語、*Romam eo* (= *je vais à Rome*. 私はローマへ行く) というラテン語、*Polin eîmi* (= *je vais en ville*, 私は町に行く) というギリシャ語では、*gam* (> *gachâmi*), *ire* (> *eo*), *eîmi* といった、現在の印欧語では明らかに自動詞とされている動詞が、名詞の対格 (*vana* > *vanam*, *Roma* > *Romam*, *polis* > *polin*) と関係している。しかしこれは、*gam*, *ire*, *eîmi* といった動詞が他動詞であったことを示しているのではない。対格のもともとの機能は「向かう方向」を表すことであり、これらの対格がその元の意味で用いられているにすぎない。古代ローマ帝国の道標(その場所からローマへの距離を示すもの)が、目指す町の名の対格形(*Romam*)と古代マイル数だけで表されていたのは、対格形そのものが、その町への「方向」をあらわすことができたからである。

現在、前置詞とよばれているもの、語と語との関係を明らかにするが独立した語とは見なされない小辞が、古代にさかのぼると副詞として機能している例はいくらでもある。また現代は冠詞とよばれているもの、かぶさった名詞の意味を明確にはするが、個としては独立して使用されることのない小辞が、古くは人称代名詞あるいは指示代名詞として独り立ちしたはたらきをもっていたことが、ラテン語やホメーロスの言語から察することができる。

すなわち、古代の統辞法(語と語、あるいは語句と語句との関係を律するきまり)においては一般に、動詞にかぎらず、それぞれの品詞は、その形において独立していたのである。

つまり Vanam gachâmi, Romam eo という構文は、「行く」(gam, ire) の他動性を表しているのではなく、語がそれぞれ他の語の支えを必要とせずに機能していたことを示している。このような状況では、他を支配する「他動詞」という観念は生じない。他動詞とは、本来その動詞の意味が対象に及び、その対象をなんらかの形で支配するものだからだ。

こうしてみると他動詞がどのようにして生じてきたかを想像することは難しくはない。他動詞性とは、ある動詞とその対象とのあいだに自然な脈絡を認め、その関係が必然であると感じてしまう人間の心の中に生じたと言える。力を発する主体（ふつう、主語とよばれる）があり、その力を受ける客体（目的語）がある。こうして向かう方向、到達する方向、受ける方向を独立して表していた対格は、主語の力（意味）を、動詞を通じて受けるだけの格となった。

はたらきの違いはあれ、独立して自由であり、いわば「平等」であった語の世界に、こうして「支配」の関係ができ、それに応じた文構造が生じた。文法はこうして生まれたのである。指示詞あるいは人称代名詞から冠詞への変化、副詞から前置詞への変化も他動詞の発生とおなじような状況から生じたと思われる。

現代の受身構文は客体（目的語）を主体（主語）の立場に据えることである。他動詞発生後にできたこの構文は、動詞の示す行為が主体になんらかの形で帰ってくる（これも極めて自然なこと）という、ギリシャ語の中道相、フランス語の再帰代名動詞のもつ意味をもっともはっきりした形式で表すものである。

12) アスペクトと時制

フランス語 *Il fume.* には「かれは（今）タバコを吸っている」と「かれはタバコを吸う（人だ）」という、ふたつの意味がある。一番目の意味は「吸う」ことの始まりや終わりに関係なく、「吸っている」今の継続状況を重視している。文法用語ではこれを「未完了アスペクト」と呼ぶ。これに対し二番目の意味は継続している状態ではなく、「吸う」という、始まりと終わりがある行為全体に着目している。結局、「吸う」という行為は一回ごとに完了することを前提としているので、このアスペクトは、「未完了」に対し「完了」と呼ばれる。

「タバコを吸っている」で注目されているのは、「吸っている」現在の継続状態である。一方、「完了アスペクト」（かれはタバコを吸う）は「タバコに火をつけ、それを吸い込む」ことをよくする彼のことを言っているのであって、「吸っている」今の瞬間を描写しているのではない。「タバコを吸っている」のは今の彼の姿だが、「タバコを吸う」彼は今、食事をしているもよい。「タバコを吸っている」彼は、いま初めてタバコを吸っているのかもしれない。「タバコを吸っている」彼からは、過去のことあるいは将来のことはわからないが、「タバコを吸う」彼からは、この人は過去にも吸ったし、これからも吸うだろう、ということが暗示される。フランス語はこんなに違うふたつの意味を *Il fume.* という一文ですませる。

さて、いわば「事態を内側から把握する」未完了アスペクトと「外側から全一的に把握する」完了アスペクトとは「時」とどんな関係を持っているのだろうか。完了アスペクトが、過去にも現在にも、さらに未来にも矛盾しないことは「彼はタバコを吸う」という完了アスペクトの文が過去も、現在も未来の事態とも矛盾しないことからわかる。

完了 / 未完了というアスペクト区分を維持しているロシア語は、動詞の完了態である現在形がふつうは未来を表し、時に現在、そして場合によっては過去をあらわすことがある。また過去形と呼ばれる形が未来を表したり、未来形と呼ばれるものが過去を表したりするアラビア語があり、ギリシャ語のアオリスト（無限定過去）はホメーロスの言語では、現在や未来

にも用いられることがある。フランス語の完了アスペクトと未完了アスペクトの対応は、過去時制においては単純過去・複合過去（完了）対、半過去（未完了）の対応として表される。

さて未来時制のアスペクト構造はどうか。ロシア語には未来に用いられる形がふたつあり、ひとつは完了態現在形、もうひとつは複合未来形と称されるものである。この複合未来形は *être* にあたる存在動詞と動詞の不定形から成っていて、形式的にはフランス語の *être à + inf.* (これも未来形を表すことができる) に相当し、未完了アスペクトを表すとされている。

確かに、*Demain, tant qu'il fera jour, tu travailleras.* あす、日のあるうちは仕事をしなさい、のような文のなかの *fera* のように、未完了アスペクトの未来形がありうることは納得できる。しかしこの未完了アスペクトは、*tant que* (... である限り) のような制限的な表現を伴う。未来形で言われているこの文の要点 (*tu travailleras*) は完了アスペクトである。

フランス語で近未来 (*futur proche*) と呼ばれる *aller + inf.* には「...しようとする」という意味と「...しに行く、行って...する」という意味があるが、近未来と呼ばれているのは「...しようとする」という、未完了アスペクトの方で、「...しに行く、行って...する」という、完了アスペクトとの方は近未来とは呼ばない。

また近未来は現在形と半過去（過去未来）形にしか用いられない。*Il est allé fermer la porte.* という複合過去形の文は「戸を閉めに行った」あるいは「行って戸を閉めた」という完了アスペクトの意味ではありえる。*Il ira fermer la porte.* という未来形の文も同じことで、「戸を閉めに行く、行って戸を閉める」という、未来の完了アスペクトの意味である。

つまり、*aller + inf.* という近未来は、未来時制（完了アスペクト）なのではなく、現在時制（未完了アスペクト）なのである。

13) アスペクトと半過去

隣に座った乗客からタバコを勧められ、Non, je ne fume pas, merci. タバコは吸わないんです、どうも、と答えるとき、この動詞 (fume) のアスペクトは完了であって未完了ではない。「私」がタバコを今すっているのではないことは明らかなので、「わたしは今吸っているのではない」という意味にはなりようがない。一方、ベランダに出て外を眺めているとき Qu'est-ce que tu fais là, tu fumes? と内から声がし、Non, je ne fume pas, je regarde. と答えたとき、この意味は「タバコを吸わない」という意味ではなく、「いまタバコを吸っているのではない」という、未完了的意味にちがいない。

こうした2つのアスペクトをもつことができるフランス語の現在形を考えてみると、一方の意味はタバコをふだん吸わない自分の習慣のことを言っているのであり、もう一方はこうした習慣に関係なく、今現在の自分の状況を伝えている。つまり、描写される時に関しては、一方は現在に限定されることなく、過去にも未来にも関係し、他方は現在の限られた具体的場面にだけ関わっている。現在形のもつこうしたふたつの意味は「過去における現在」と呼ばれる半過去にも備わっている。

1) Quand il *fumait*, il allait toujours dans le *fumoir*.

タバコを吸うとき彼はいつも喫煙室に行くのだった。

2) Il *fumait* à ce moment-là dans le *fumoir*.

彼はそのとき、喫煙室でタバコを吸っていた。

1) の文は習慣的なことを言っているのに対し、2) の文は、過去のある具体的な場面について言っている。1) は少なくともそのときまでは続いていた（そしておそらくは将来も続くかも知れない）習慣を述べているのに対し、2) の文は、そのとき以前と以後の「喫煙」についてはまったくわからない。問題となっているのはそのときの状況のみである。

Vous gâtez mes enfants, (il ne) *fallait* pas...

子供にこんなことをしていただいて、恐縮してしまいます。

Je voulais deux places en TGV pour aller sur Paris ...

パリ〈方面〉行き、TGVの切符、2枚欲しいのですが。

Un pas de plus en avant, tu étais mort.

もう一歩前に出たら、あんたは死んでただろう。

この3つの例のような半過去では、語り手が現実（の今）から離れたところに心を置くことによって、現在、あるいは現実のもつ直接性を緩和しているとみることができる。半過去はこうして過去時制と限定するより「現在（現実）以外の場面からの視点」と言った方がよい。

「現実以外に置かれた視点」としての半過去は、接続法に近く、最後の例文「もう一歩前に出たら、あんたは死んでた」に見るような接続法的意味を介して「未来」と通じることが可能である。

ラテン語のいくつかの動詞（例えば、lego 読む、edo 食う、capio 捕まえる、audio 聞く、など）の未来形 (leget, edet, capiet, audiet) と接続法現在形 (legat, edat, capiat, audiat) が酷似し（一人称単数では同形）、また sum ある、possum できる、amo 愛する、などの動詞では未来形と半過去形とが似ている (erit /erat, poterit / poterat, amabit / amabat) のには上に示したような理由がある。

古フランス語で未来や半過去を表す新しい語尾が発達したのは、必ずしも文字に支えられていなかった発音が正確さを欠くようになり、このような紛らわしい混同しがちな発音では未来や接続法、あるいは未来と半過去を区別できなくなってしまうからである。

14) 単純過去と複合過去

フランス語の単純過去の形はラテン語の完了態 (*perfectum*) に由来している。ラテン語の完了はギリシャ語の完了と同様、本来は「完了したある行為の結果として生じている現在の状態」を表す。

カエサルが、現在のクリミヤ半島で、ボスポラス王国軍を打ち破ったときに元老院にあてたメッセージ、

Veni, vidi, vici. 来た、見た、勝った。

という簡潔な言葉は、韻を踏んだ2音節の完了形で言われている。この言葉を動詞の形だけの文法的対応を考えてフランス語に直訳すると、*Je vins, je vis, je vainquis* という、単純過去形式になる。しかしカエサルによるラテン語のニュアンスは、フランス語の単純過去とはかなり違う。「完了した行為の結果として生じている現在の状態」をあらわすものであるラテン語のこの完了形の意味は、フランス語ではむしろ、

Je suis venu, j'ai vu et j'ai vaincu.

というような、完了した行為の、現在まで続く余韻を強調した複合過去の言述に近く、さらにこの複合過去は、

Je suis là. Le pays est devant moi et je suis vainqueur.

私はいまここだ。国は目の前に広がっている。私は戦いに勝った。

と現在形で宣言しているのにほとんど等しい。

しかし、フランス語の複合過去に近い意味をもっていたラテン語の完了形（形の上ではフランス語の単純過去）は、フランス語では完了行為そのものだけを強調する方向に意味がずれていき、定過去 (*passé défini*) と呼ばれたことがあるように、語り手の現在とは関係のない過去だけを表す時

制となってしまった。

これに対し複合過去は、現在形の助動詞を用いるせいもあって、ラテン語が完了形で表していた「完了した行為と現在の状況との気持ちのつながり」を表現する方法として、口語体でも文章体でもふつうに用いられるようになった。他方、単純過去の方は、書き手の現在とは関わりをもたない過去をあらわす文語的表現として固定した。

グレヴィスの *Le Bon Usage* 『慣用法』によれば、文化や政治の中心から離れた地方ではいまだにこの単純過去が、会話においても用いられているところがあるという。

南仏語は、スペイン語やイタリア語同様、フランス語とははっきりと違った言語だが、この言葉では、主に、きょう一日のことに用いられるきわめて現在的（というより、英語の現在完了に似ている）複合過去に対し、単純過去は現在からはっきり隔たった過去のことを言うのに、会話でも使われる。また「いまちょうど終えたばかり」というように、現在完了相を強調したい時は、フランス語では問題のある言い方とされている複・複合過去 *passé surcomposé* (*ai agut minjat = j'ai eu mangé*. いまちょうど食べ終えた) がしばしば用いられる。南仏語では単純過去が、ラテン語における完了形のように、口語のなかに生きた位置をまだ占めているのである。

この点では、南仏語はラテン語からフランス語への中間点にあり、フランス語の歴史を知る上での貴重な生きた資料と言える。

15) 複合過去と半過去

フランス語の複合過去は、助動詞としての *avoir* (あるいは *être*) + 過去分詞、という組み合わせであり、構造は英語の現在完了に似ている。ここで用いられる過去分詞は、ラテン語では完了分詞と呼ばれていたように、あることが完了している状態を表す分詞である。

Il est venu. 彼はやって来た。 *J'ai couru.* 私は走った。

という複合過去の文はもともと「彼は来た (状態にいまある)」、「私は走った (状態にある)」という、それぞれ完了した事態を背景にもつ現在の状況を表していた。しかし完了する行為の方に重点が移り、フランス語では〈*avoir, être* + 過去分詞〉は複合過去として、ふつうに過去を表す文法制度となった。しかし、こうした成り立ちをもつ複合過去は、単に過去を客観的に述べる単純過去とちがひ、完了した状態が情動的に語り手の現在につながっていることを含意する。時間的には遠い過去のことでも、常に現在に関わりがあるものとして語られる会話では、複合過去だけが過去を表す基本的な形式となった。フランス語の複合過去は形式的には英語の現在完了に似ているが、持つ意味はかなりちがう。

プルースト (1871 - 1922) は、長い小説の冒頭を複合過去から始めた。

Longtemps, je me suis couché de bonne heure. 「長い間、私は早く寝たものでした」という文章は、*Longtemps, je me couchai de bonne heure.* という単純過去の文と比べて意味は同じでも、読者に与える親しい語り口という点で大きくちがっている。さて複合過去と半過去のちがひはどうか。

「あのころ、ボクは爺さんのあとばかりくっついていた」という意味をフランス語では次のように2つの時制で言い表すことができる。

1) *A cette époque, j'ai toujours suivi mon grand-père.* (複合過去)

2) *A cette époque, je suivais toujours mon grand-père.* (半過去)

「爺さんのあとばかりくっついていた」過去の習慣をいま全体として思い起こし、それが過ぎ去ったものとして外側から述べたのが 1) の複合過去による表現である。語り手のボクは「爺さんのあとばかりくっついていた」時代から今は離れていて、「あそこ、爺さんのあとばかりくっついていたなあ」という感じを表しているのである。

一方、2) の半過去による文は、まるで絵画のなかの風景、あるいは映画の情景のなかに吸い込まれたように、「爺さんのあとをくっついてばかりいた」ころの「私」の視点から描かれたものである。この半過去による表現は、その習慣がいつはじまったのか、あるいはいつ終わったのかということには頓着しない。習慣の内側からこの情景を相手に現出させるのである。複合過去と半過去のこうした視点のちがいがから生じる描写の表現力は、英語にはない文学上の優れた長所である。

ここで重要なことは、習慣を示しているものは半過去という時制ではなく、*A cette époque* と *toujours* という副詞表現だ、ということである。こういう副詞を欠くときは、習慣という感じは薄れ、この半過去は単に「そのとき継続している行為（過去進行形）」を表すことになるだろう。半過去が「過去（における）現在」と呼ばれるゆえんである。

主文が過去時制に置かれるとき、従属文に置かれた半過去がもつ意味はこの「過去においての現在」である。日本語にこうした「時制の一致」と呼ばれる現象がないのは、複数の文章間の関係が構造的ではなく、並列的であることに関係している。つまり日本語では主文、従属文という関係は意味としてはあっても、時制の一致といった文法的形式はない。

Je lui ai dit que mon grand-père ne rentrait jamais bredouille.

ボクはそいつに、ボクの爺さんは手ぶらで帰ることはないぞと言ってやった。

日本語では現在形で言われる部分（手ぶらで帰ることはない）、はフランス語では、過去 (*rentrait*) を用いるのである。

16) 間接話法（並列文法から立体文法へ 2）

間接話法とは、直接的なコミュニケーションを間接的なものとするための表現法である。これは、関係代名詞を用いる関係文とならんで、現代印欧語の特徴のひとつと言える。

ある文を伝達するため、それぞれの言語はその文を特立させるための小辞を持っている。英語には *thus* とか *so*、ドイツ語には *also* とか *so*、フランス語には *ainsi (dit-il)* 「そのように（彼は言った）」などがある。

こうした小辞は言われたコトバをそのまま引用することを可能にする。この方法は時代や場所に関係なく、いつでもどこでも用いられてきた普遍的方法である。この種の小辞として、日本語には「と（言う）」の係助詞「と」がある。ホメーロスの頃のギリシャ語には *hôs (phato)* 「このように（彼は言った）」、ラテン語には *sic (ait)* 「このように（彼は言った）」。サンスクリット語には *iti (uktvâ)* 「このように（言って）」、*evam (uvâca)* 「このように（彼は言った）」といった同種の語があった。

こうした小辞を用いる（用いなくてもよいが）直接的な表現（直接話法）に対し、フランス語にはふたつの間接的な話法がある。

« *Je viendrai sûrement* » (*ainsi a-t-il dit*. きっと参ります、と彼は言った（口語では *Je viendrai sûrement qu'il a dit*. も可能)、というような直接話法による表現は、間接話法では、つぎのような2種類の文体で言うことができる。

Il a dit qu'il viendrait sûrement. (A) あるいは

Il viendrait sûrement. (B).

日本語では「(ボクは) きっと行く」というように一人称で解釈される (B) の文は、「自由間接話法」(*style indirect libre*) と呼ばれることがある。

ここで形式のちがいが意味のちがいを招来するわけではない。しかしこの直接話法から間接話法への変化で目立つ点は、直接話法の1人称が、間接話法では3人称になることだ。すなわち事態を見る視点の大転換がある。

次の変化はもっと重要である。すなわち直接話法においては、たがいに

独立しながら補足しあっている「きっと行く」と「彼が言った」というふたつの情報がいわば併置されているのに対し、間接話法 (A) においては、並べられ、補足しあっているふたつの情報がひとつの文に再構築され、情報の一方は「主」、もう一方が「従」という構造になることである。こうして最初は平面的な文構造を通して、「主」(彼は言った) と「従」(きっと行く) という立体構造 (A) が生まれる。

情報の併置的、平屋的構造から、印欧語の立体的、階層的構造へ変化したものが (A) である。その情報のひとつである主文(彼は言った) の理解をコンテキストにゆだねて取り去り、従属文(きっと来る) だけを浮かばせたものが、文学的な (B) 方式である。

直接話法による情報配列は並列式であり単純だ。伝達は直接的であり、うむを言わせない。一方、間接話法 (A) の情報配列は構造化され複雑になっている。いわば、並列的文法から、立体的文法への変化である。こうした構造ではない日本語の話法はあきらかに並列構文的な言語である。

この現代インド・ヨーロッパ語の特徴である時制の一致を伴う間接話法は、もちろん言語の初期段階から存在したわけではない。印欧語のなかでももっとも厳密な文法をもつことで知られるサンスクリット語にこの話法は存在しない。この点、サンスクリット語は日本語と同じである。

はじめ情報は並列的に並べられた。並列された情報の因果という合理的関係は、はじめは自然に理解されていたがそのうち形式化することが求められた。別様にいえば、並列的文章を論理的にわかりやすく並べ替えようとして、印欧語がたどりついたものが間接話法だったのである。

直接話法は、多かれ少なかれ、はたから反論や疑問をさしはさむことができない表現であるのに対し、第3者の視点を通じた客観的な間接話法は、表現されたことについての批判の視点を許す。われわれはこのクッションが置かれたような表現に拘束されないからである。

直接話法、間接話法、また自由間接話法はそれぞれ違った特徴をもつ。それは、間接話法はそれを用いる人々に、表明されたものに対し批判的視点を生み出しうることであり、さらに自由間接話法は第3者の心のなかに聞き手(読者) を入り込ませうることである。

17) 関係文（並列文法から立体文法へ 3)

印欧語文法では、この関係文（関係代名詞を用いる文）も比較的後になって獲得されたものである。フランス語の *qui, que, dont* その他にあたる関係代名詞は、古い印欧語であるサンスクリット語には存在せず、ホメーロスのギリシャ語でも見られるのは初期段階の形式である。

フランス語では関係代名詞を用いて表す文を、サンスクリット語では反復と指示という、ふたつの意味を持った小辞を用いる。

サンスクリット語には関係代名詞という名で呼ばれているものがあるが、それだけでは英語やフランス語式の関係文をつくりだすことはできない。サンスクリット語の関係指示詞 *yad-*「これ」は、これに対応する *tad-*「これ」とともに用いられねばならない。*yathâ-*「このように」という関係詞も同様に、*tathâ-*「このように」を必要とする。

昔の関係文の構造は、大体つぎのようなものだった。

Sa bonté est incontestable : celui-ci donna aux pauvres.

この者の善意は明白だ。この者は貧者に施した。

Si veut le roi, si veut la loi.

王が欲するごとく、法も欲する。

こうした指示詞の相関はラテン語の古い言い回しのなかにも見られる。

Qui pro innocente dicit, is satis est eloquens. 「無実の者のために語る者、その者は十分に雄弁である」というラテン語の古いことわざは、フランス語では *Qui plaide pour les innocents (, celui-ci) est bien éloquent.* 「無実の者のために弁護する者は雄弁である」のように、2番目の指示詞を節約して言うことができる。こうした古い印欧語の方法には欠陥があるように思える。しかし、古人は常識があったので、「雄弁な者は無実の者のために語る」というような解釈（これも可能だが）は避けられていた。

日本語には関係代名詞と呼ばれるものはないが、いま見たばかりの古い印欧語の方法と同じような並列的な方法があり、現代印欧語の関係文が表すものと同じ内容を表現することは日本語でも十分可能だ。関係文に関し

ては、日本語と古い印欧語とは同じ地平にある。

関係代名詞が指示詞から生まれたものであることは明白である。フランス語の関係代名詞 *qui, que* はラテン語の関係詞 *qui, quae, quod* にさかのぼる。*qui, quae, quod* は疑問詞にも用いられていた。これらの関係詞には、もともと指示詞と疑問詞が内在していたのである。実際、関係代名詞には、疑問の観念が内在しているように思われる。*qui* はもともと (*celui*) *qui* という意味であった。文法学者の多くは関係文の起源として、次のような文を想定している (エルヌー・メイエ『ラテン語語源辞典』のなかの例文)。

Je cherche qui est venu. 誰が来たか探している > 来た人を捜している

Je sais qui est venu. 誰が来たか分かっている > 来た人は分かっている

このように関係文はつねに疑問文の様相を呈している。全体的に関係文は問いと返事の遊戯から成り立っている観がある。しかし現代の関係代名詞の疑問の観念はかなり弱いものとなってしまった。したがって現在は、疑問詞ではなく、関係指示詞、つまり人称代名詞のようなものと考え方が実情にあう。

C'est elle qui se lève le plus tôt. (一番の早起きは彼女だ) この文は、

Qui se lève le plus tôt ? C'est elle. (誰が一番の早起きか、この人だ)

ではなく、*Celle-ci, elle se lève le plus tôt.* (この人、彼女が一番の早起きだ) のように、関係代名詞 *qui* = 人称代名詞 *elle*、と理解するほうが自然である。

現代の関係詞の組織は必要以上に完璧になってしまった。しかし口語や南仏語の *que* は中世フランス語の *que* のように、フランス語の関係代名詞 *qui, que, dont, où* すべての役目を果たすが、間違いがおこることはない。

(南仏語) *l'aiga que raja* = *l'eau qui coule* 流れる水

(南仏語) *la femna que vos parli* = *la femme dont je vous parle* 話題の女性

18) 接続詞 (並列文法から立体文法へ 4)

接続詞の機能はもともと副詞とさして変わらなく、文法論上あまり注意が払われたことはなかった。しかし接続詞は、他の品詞同様、あるいはそれ以上に言語について多くの豊かな教えを含む品詞である。

接続詞は語源 (ラテン語動詞 *conjungere* 結ぶ、ひとつにする) が示しているように、ふたつ以上の語、あるいは語句、または文章といった、同質のふたつ以上の言葉のまとまりをむすぶ役目をはたす。

Jean et Marie ジャンとマリ、という表現では、ふたつの名が *et* という接続詞によって結ばれ、ひとつの全体を構成している。一方、*Jean ou Marie* ジャンあるいはマリ、では、*ou* によって表面上結ばれているふたつの名は、実際は、一方であれば他方ではないという排他的関係を作り上げている。接続詞 *et* は引き寄せ合同させようとするのに対し、*ou* は遠ざけ、離反させ、排除しようとする。表面的には「接続」、内容的には「排除」、これも逆説的に「接続詞」によって表現される重要な意味である。

Non pas ceci, mais cela. これではなくて、あれ、という、あるものを捨て別のもをとる、という表現における *mais* も接続詞である。したがって接続詞とは「つなげるもの、結ぶもの」というよりは、ふたつあるいはそれ以上の語または文章間に、ある論理的な秩序を外形的にもたらず語である、ということができる。いくつかの言述のあいだに秩序をもたらすためには、まずそれらのあいだに論理的因果関係を打ち立てる必要があった。

フランス語にはこうした接続詞が豊富に存在するが、接続詞というものはふつう、精神の遅々とした長い熟成から生じたものであることをわれわれは知っておかねばならない。

語や文の配列は必ずしも論理的に整頓されているとは限らない。並列された言葉に、接続詞を用いて無理に論理を通そうとすると、その無理が言葉に跳ね返り、もとの意味が変わってしまうことがある。

Chacun pour soi, Dieu pour tous.

人はそれぞれ自分のため、神は万人のため、ということわざがある。

このぶっきらぼうなふたつの文のあいだに *et* または *mais* を入れてみることは可能だ。しかし、*Chacun pour soi (et / mais) Dieu pour tous.* という、接続詞を用いてふたつの文を論理的に関係づけた文は、オリジナルとは少し違ったものになる。

この違いは無視されてはならない。*et* や *mais* という接続詞を用いなかっただのは、こうした意味の特定化、明確化を生むかもしれない要因をあらかじめ取り除いておきたかったのかも知れない。

接続詞を多用して論理的に話そうという人は、逆に接続詞のもつこうした論理の圧力のせいでせつかくの脈絡が乱れる場合がある。多様な接続詞をうまく使いこなせることは、論理的説得性をもつことに違いないが、反面、理屈にからめとられ、知らずに、そこから身をほどくことができない状態に陥ることでもある。

接続詞は、印欧祖語における語の並列状態が、複雑になって行く統辞法に移行する過程で生じてきたものである。この立体的、構造的言語状況において接続詞は、構築物のセメントの役目を果たしているのである。しかしこのセメントは建物の構造をあまりに強固なものにすることがあるため、そのなかの住人は息苦しくなることがあるのだ。

サンスクリット語で接続詞が少ないことは知られている。実際、めぼしいものは *ca* (チャ) そして、と *vâ* (ヴァ) または、の2つくらいしかない。この言語には、フランス語の *que* (英語の *that*) に相当するような従属節用の接続詞は存在しない。しかし、それでも（あるいはそれだからこそ）サンスクリット文学は自由で豊かだと言えるのかも知れない。そこでは、でも、しかし、だから、それから、といった、前後の脈絡を考えねばならない拘束的小辞が排除されていて、読者は自分の脈絡を通じて自由にテキストに接近できるからである。

19) 「動く名詞」から動詞へ

フランス語の名詞をふたつに分ける基準として「性（男性、女性）」があった。そのほか、「動きの観念をもつもの／持たないもの」という分け方を考えることができる。一方は「机、家屋、山」というふうに、動きとか過程の観念のほとんど感じられない静止的名詞であり、存在の観念が優勢である。もう一方は「起床、仕事、苦しみ」というような、行動、動き、変化する状態などを表す名詞である。ここではこの後者について考えてみる。

L'amour 愛、という語はこの名詞の2番目の範疇に入る。「愛する」行為、または「愛される」という状態を含意しているからだ。**Mon amour** は「私の愛する人」であり、「私から愛されている人」である。私（たち）もまたこの「愛する人」から「愛されている」かも知れない。この人は私の「愛の対象」であり、この人が私（たち）を愛しているなら、愛の主体ともなりうる。

Le don 贈り物、は人に「与える物」であり、人から「与えられる物」でもある。またこの「贈り物」自体、贈られた人になにかよいことを「与えるもの」でもある。それを使用（享受）するように「与えられたもの」であるからだ。

Le signe しるし、という語にも同じことが言える。それは「しるされたもの」であると同時に「しるすもの」でもある。40人の盗賊団に「しるされた」アリ・ババの家は、盗賊が「しるしたもの」であり、他と区別するための「しるし」となった。このひとつの語には能動的意味（しるすもの）と受動的な意味（しるされたもの）とが共存している。こうした「しるし」をギリシャ語ではセーマ（しるし、予兆、墓標）というが、セーマは「予兆」という意味では「(神に) しるされたもの」であり、「墓標」という意味では「(墓を) しるすもの」である。

『イーリアス』の第11歌。オデュッセウスは戦闘途中、仲間からはぐれ、気が付くとトロイア勢に囲まれている。「(トロイアの) 兵士らは、この災いを自分たちの真ん中に取り囲んだ」(413行目)。この「災い」は原

文では中性名詞ペーマ、フランス語では *fléau* 災厄、と訳されている。トロイア勢にとっての疫病神オデュッセウスをこう名付けているのだ。

第 10 歌ではギリシャの将、ディオメデースが、ドロロンという名のトロイア方の斥候を撃ち殺してから、「お前はもはやアルゴス（ギリシャ）勢の災いとはなるまい」（453 行目）と言い放つ。この 2 例の「災い（ペーマ）」は、「(人を) 苦しませる者」という意味がふさわしい。

しかしペーマには、「苦しんだ者、苦しむ者」という自動詞的な意味もある。猟犬に囲まれ、手負いの狼のような有様のオデュッセウスにはむしろこの意味のほうがふさわしいかも知れない。彼の絶体絶命の叫びをメネラーオスが聞いて駆けつけ、オデュッセウスは九死に一生を得る。

動的名詞の意味は、その動きの対象となる名詞に能動的に関与する場合（苦しませる）と、その名詞に対し受動的客体となる場合（苦しめられる、苦しむ）とがある。こうした態の違いに加え、完了した事態が現在を準備したようにみえる場合がある。つまり名詞のなかに時間が入り込んでいるのである。*course* 走り、というフランス語名詞は、*courir* 走る、という動詞の古い過去（完了）分詞（現在の過去分詞は *couru*）から成る。*vie* 生、*mort* 死、という概念も *vivre* 生きる、*mourir* 死ぬ、の完了した状態を表した語（ラテン語完了形 *vixi, mori*）と関係しているだろう。完了（過去）の意味がもしこうした現在的名詞を成立させているとしたら、これらの名詞はほとんど動詞的であると言わねばならない。

「苦しんだ」もの、「苦しむ」もの、「苦しませる」もの、といった、後に時制や、態、アスペクトのように主に動詞の守備範囲とされたものが、形の変化が簡素であった名詞に同居していた場合があり、こうした過程がさらに明確に表わされるためには、語のさらに複雑な仕組み（動詞）が必要となった。こうして生まれた動詞に最初からみられる能動／受動（中道）、未完了／完了、強勢／非強勢といったアスペクト的二元性は、この「動く名詞」のなかにすでに胎動していたのである。

20) 人称代名詞の謎

フランス語が属している印欧語の人称代名詞にはいくつかの謎がある。まず、各言語の 1、2 人称の代名詞の起源は同じであるのに、3 人称の代名詞は言語によって異なる系統の指示詞が用いられている。印欧語の昔は 3 人称固有の人称詞がなく、3 人称には指示代名詞が用いられた。印欧古語の構造解釈にすぐれた知見をもたらしたバンヴェニスト (Emile Benveniste 1902 - 1976 シリア生まれのフランス人言語学者) などは、人称の概念を 1、2 人称だけに限っている。さらにこの (1、2) 人称単数代名詞には、アジア語の影響を受けたとされる稀な言語、トカラ語を除いて、「性」の区別がない。Je も tu も、指すものは男女どちらでもかまわない。

単数形と複数形とが無関係にみえることも不思議である。je と nous、tu と vous (英語では I と we、thou と ye) との間には形の上でのつながりはない。古典語ではふつう、主語は動詞の語尾によって表された。その主語をさらに強調するための代名詞主語と補語との間に、2 人称単数代名詞 (tu / te, toi, ton など) には子音 t(...) の共通点があっても、1 人称単数 (je / me, moi, mon など) にはそれがないことも謎だ。この 1 人称単数主格形はフランス語の je、英語の I、ドイツ語の ich、イタリア語の io、スペイン語の yo など、それぞれ一見かなり違う。しかしこれら 1 人称単数代名詞は A・シーラーの『ギリシャ語ラテン語比較文法』(1995) によれば、ラテン・ギリシャ語の ego(n)、サンスクリット語の aham も含め、すべて egoH (H は母音的色彩をもった喉音) にさかのぼるといふ。

ドイツ語や英語ではこの egoH の前半 (eg > ek > ik > ich > i)、フランス語などロマンス語は egoH の後半 (geo > eo > io > jo > je) が残ったととりあえず考えてもよい。ここで考えてみたいのは、このかさばった egoH という、複数とも他の格とも共通点をもたない形は一体なにか、なぜこの主格 egoH はそれ以外の格 m(...) と無関係か、ということである。

Tu の古い補語形 (te, ti, teo) と Je のそれ (me, mi, meo) には形態上の共通点があり、これらの形は同時代にできたと思われるのに対し、egoH はこの複雑な構成からして、t(...), m(...) の形成以前からあったものとは考え

られない。というのは、この形が、他の代名詞に痕跡を残すことなく、単独でこの込み入った形のままでいることはできないからだ。とすれば、この1人称主格代名詞は、他の形に比べ遅れて発生したということである。

動詞語尾で表される1人称主語をさらに特立する必要はなかったのではないか。言述の主体は、それを目の前にしている人にとっては明白そのものであり、わざわざ言葉で表明する必要はない。しかし主格以外の格はそういうわけにはいかない。言葉で表明されようがされまいが、主語が明らかでない場合、明白にしておかねばならないのは目的性、つまり力を受ける側の方である。

代名詞において、主格以外の対格とか与格がまずしっかり表されるのはこういうわけである。同じことは2人称自体についても言える。主格であれ対格であれ2人称は、語り、命令、願いといった相手(1人称)の言述の内容にかかわらず、話者の相手になっているという意味で話し手の言葉の対象になっている。2人称の主格形が主格以外の格形と同じ語源環境にあるように見えるのはこうした理由があるからだろう。

さて、egoHの起源はなにか。あえていえばこれは(g)e-go-geというように、同じような意味の指示・強調辞の繰り返しではないか。ギリシャ語には、指示小辞を3度(あるいは4度)繰り返した ékeînos (e-ke-eno-s)「彼、それ」がある。さらに egôge 私、という、推定形 egoH とほぼ同じ形もある。ラテン語には指示詞の繰り返しである hic (hi-ce) これ、ときに私、がある。egoHの構造がこのようにフランス語の ce(-)lui-ci のようなものであるとすると、jeの起源は代名詞、指示詞の寄せ集めであったと言える。

21) 翻訳とはなにか？ - 『失われた時を求めて』の冒頭の句について

J'ai longtemps habité sous de vastes portiques. Baudelaire

私達は試験問題に取り組むとき、問題文を読むより先に後述されている設問を読んでから問題文を読むことがよくある。その方が問題文を読む観点があらかじめ定められて、私達の想像力がさし当り無用な迷路に迷い込まずに済むからである。推理小説などでもこのように、大団円を読んでしまってから冒頭に帰る読み方も無意味なものではない。事件のタネ明しをされてから迷宮の解明に取り組むこのような読み方は、推理小説本来の面白さを台無しにするものではあるけれども、筋を追う楽しみを奪われる代償として、筋の組み立て方や語り口の技巧に十分注意が行き届き、普段ならば全部読み終えてからはじめて気がつくようなことを、読んでいる途中から考えることができるからである。ある程度の生活の規則正しさと、毎日かなりの時間を読書に捧げることが出来ないと、プルーストの『失われた時』を読了するのは至難のことであるが、この困難を軽減するために考えられることがいくつかある。例えば、この小説の量に圧倒されないように、なるべく冊数の多い版で読むとか、あるいはポケット版のような軽い本で読むとか、あるいはまた、プレイヤー版の巻末の索引を利用して、テーマ別、人物別に拾い読みし紙魚が本を食い荒らすように版図を広げる読み方もある。

ここでもう一つの多分賢い読み方は、プルースト自身の小説の読み方をまねてみることだろう。プルーストはある宗教史家から贈呈された数巻のドイツの宗教に関する著作について、「私はあなたの本を小説のようにして読みました。つまり最後から読みはじめたということですが…」と、著者あての手紙の中で述べている。これは、プルーストが常にどんな小説でも終章から読んでいたということを示すものではないと思うが、プルーストの、小説の読み方についての一つの面白い証言である。このような読み方は、彼の小説の書き方にも当然深く関わっているに違いない。

ところで『失われた時』を例えば最終巻の「見出された時」の後半あたりから読み始めた場合、この世界に無理なく入り込めそうな気がするのは次のようなことがあるからである。

『失われた時』は周知の通り、主人公が長い逡巡の末、ようやく小説を書き始めることができる気持になる所で終わっている。つまり、第一人称で物語られるこの小説では、

「語られてきた私」(主人公)が「語る私」(作家)に変貌するところでこの小説は終わりを迎える。この「語られてきた私」が書こうと心に決めた小説が、とりも直さずそこで終わりを迎えた物語であることから、『失われた時』は円環小説と呼ばれることがあるけれども、円を想定させるこの呼称はこの小説にふさわしいものであるとは思われない。この小説には、円環というよりはむしろ、逆転、転回、回帰、逆流といった語の方がふさわしいようである。つまり、この小説の内容と同時に、その形式、構造を最もよく特徴づけている語はアンヴェルシオン inversion (倒錯、倒立)である。

「語られていた私」が「語る私」に変わる過程の中で起った無数の出来事のうちに、主人公の日常環境における昼と夜との逆転がある。病弱な「私」に「処方として義務づけられていた早寝の療法」も、成長し、物を書くことを考え始める頃にはすでに廃止されていて、逆に生活は、夜仕事をして昼眠るというコンブレーの生活をさかさまにしたサイクルに変わっている。この昼夜の逆転が、決して元に戻ることなく固定したかに見えたとき、物語は突如として冒頭へ回帰する。

井上究一郎氏はプルーストの『失われた時を求めて』の単独訳(筑摩書房)を始められるにあたり、この小説の冒頭の一句、Longtemps, je me suis couché de bonne heure. に、それまでの新潮社版の訳や集英社版の訳とはかなり異なる新しい訳を考え出されている。新潮社の訳は「長いあいだ、私は宵寝になれてきた。」であり、鈴木道彦氏による集英社訳では「長いあいだ、ぼくは夜早く床に就いてきた。」であるのに対し、井上氏の新訳は「長いあいだに、私は早くから寝るようになった。」である。この新訳を「やっとなえつ」かれた事情は、筑摩世界文学大系57「プルーストの1」付録である「訳者のメモ」に詳しい。

書き出しの部分によって有名な物語、あるいは随筆は多い。これは冒頭部分は読者の偏見のない精神が、その物語の世界にふれる最初の最も鋭敏な接点であるからである。作者はまた、このような読者の気持を引きつけるために、冒頭に細心の注意を払うのは当然である。この結果往々にして冒頭の句は作品全体を象徴するとまではいかなくとも、その世界の雰囲気効果的に表現している場合が多い。『平家物語』や『方丈記』の冒頭は作品の理念を代表しているのであるし、また『異邦人』の冒頭にはムルソーの精神世界の雰囲気がそこに凝集されていると見ることができる。

娯楽性に富んだものではまた違う意味でこの冒頭は重要なのかも知れない。アガサ・クリスチーの『アクロイド殺人事件』の冒頭の一ページをいかに注意深く読んでも、この驚くべき犯人の見当が簡単につくとは考えられないけれども、鍵はしかし冒頭の一人

称の語り口の中に隠されていた。全部読み終え犯人がわかった後、ただちに冒頭部分を読み返し、あらためてこの意外なトリックに感じ入る読者は少なくないのではなかろうか。

ところでこの、プルーストの文章としては例外的に短い冒頭の文はいったいどのような機能を持ち、日本語ではどのような訳が適当なのであろうか。

井上氏は、「ヌーヴォー・ロマンの数多くの実験や理論が世に問われ、またロマンとレシとの構造の相違をめぐって、人称、時制がどのように作用するかが論じられるようになった現在では、改めて『失われた時』の冒頭の複合過去の意味を考え直さなくてはならなくなった」と述べ、「この問題が訳の上で何らかの解決を見ない限り、訳者としては気が進まないし、第一無責任であるように思われ、逆になんとか方法が見つければ、あとは根気と時間の問題であった。そしてそうでない限り、私にはいまさら全訳の勇氣も意義もなかった」と続けておられるが、さすが練達の人であられる氏は、この冒頭の重要性を充分認識されていて、もしその解釈に失敗すると、続く全作業が迷路に迷い込むことになりかねないことを知っておられたのである。

「もっとも」と氏は続ける。「これがエクリチュールの問題であると言ってしまうと、小説の原文であるフランス語の問題であって、日本語の翻訳ではそれにこだわることはない、ということにもなりそうである。しかし翻訳がその国の現代語のある時点でのもっとも忠実な知性と感受性との一標識であるとするれば、小説の美学において世界共通の問題意識を、一つの先覚的な作品の翻訳に反映させることなしに、新しい翻訳の仕事にたずさわるのは何としても寢覚めのわるいことであろうし、新しい読者にプラスするものもなく、いたずらに出版社のレペルトワールを増すだけであろう。」

しかし私には、こうして考えつかれた氏の「長いあいだに、私は早くから寝るようになった。」という訳が、氏の前述の抱負を忠実に反映したものであるとはどうしても思われぬのである。

結論を先に言うと、私にとってはこの冒頭の翻訳は、鈴木氏の文体をまねれば「長いあいだ、ぼくは夜早く床に就いたものである。」であり、新潮社の文体をまねれば「長い間、私は宵寝をしたものである。」というようなものでなくてはならない。あるいはもっとわかりやすく、「長い間、私は早寝をしたものだ。」と言ってもよい。また「...したものである」、「...したものだ」という言い方を好まないときは「長い間、私は早寝をした(のだった)」とも言えるが、この場合は前の三つの言い方より習慣を述べているという感じは少し薄れる。私はこれらの訳が「その国の現代語のある時点でのもっとも忠実な知性と感受性との一標識」であるなどとは決して思わないけれども、とにかく意味上、井上氏の訳との違いは明瞭であるように思う。井上氏がなぜこのような訳をさ

れたかを考えてみる前に、私の訳と新潮社、あるいは鈴木氏の訳との違いを検討してみよう。

「長い間、私は宵寝になれてきた。」という訳と、「長いあいだ、ぼくは夜早く床に就いてきた。」という訳は、お互いに文体はかなり違ってはいても、私にはだいたい同じ意味のことを言っているように思える。「長い間、私は早い時間に寝ることにしてきた」というような訳もこの二つの訳から根本的に隔たっているものではない。この三つの訳は少なくともこの語る現在まで続いてきたある習慣を述べている。この三つの訳に共通する「... (して)きた」という文言は、その習慣がある時期まで続いてきたという継続性をことさら強調しているものであるように思える。

ところでこの「... (して)きた」という言い方は、「私」のある時点へ読者をいざなうものではあるが、その「私」の早寝の習慣がその後どのようにになってしまうのかということは何ら読者に知らせるものではない。つまりこれらの訳によれば、この早寝の習慣は、物語が始まるある一時点まで続いてきた習慣であり、その後その習慣は何らかの契機でなくなってしまうのかも知れないし、また相変わらず続いていくのかも知れない。いずれにしても、「その後」のことはまだわからない。

またこの三つの訳に共通しているのは、この中で語られている「私」と、それを語っている「私」(例えば作者)はほとんど分離されておらず、むしろ作者あるいは語り手の視点は、一人の少年の目を借りて少年時代を語るときのように、この語られている「私」あるいは「ぼく」の中に封じ込められている観がある。したがって読者はとりあえず、ある時までそのような早寝の習慣をもっていた「私」というある単一の存在を思い浮かべるだけである。

ところが、「長い間、私は夜早く床に就いたものである。」あるいは「長い間、私は早寝をしたものである。」ということになれば、これらの事情はかなり異なってくる。まずこの早寝の習慣は「ある時」まで続いてきたのではなく、「長い間」という時間的に極めて漠然とした語によってではあるが、少なくとも過去において、始めから終わりまでが限定されている。そしてこの習慣は、語る「現在」には決して及ぶことはない。つまりこの早寝の習慣は、昔のある時期だけのことであり、これを語っているらしい人、つまり現在の「私」にはもうその習慣がないということを読者は思うのである。この過去の一時期を限定している意味は *Longtemps* (長い間) という副詞によるというよりはむしろこの文の時制である複合過去によるものであるが、この *Longtemps* と複合過去は過去の一時期を区切るという意味において協力し合っていると言うことができる。これは逆に言えば、過去を限定する (*Pendant*) *longtemps* と、時間を限定する機能のない半過去はこの際両立せず、また限定機能のない *Depuis longtemps* と複合過去も両立しないこ

とからもわかることである。フランス語では多分 (Pendant) Longtemps, je me couchais de bonne heure. という言い方や、Depuis longtemps, je me suis couché de bonne heure. という言い方はない。ありうるのは (Pendant) Longtemps, je me suis couché de bonne heure. あるいは Depuis longtemps, je me couchais de bonne heure (...) という文である。

『失われた時』の冒頭の Longtemps を Tous les jours, à cette époque (当時は毎日) などという語句で言い替えてみると、この冒頭の複合過去のもつ意味はもっと明確なものとなる。

長い間(当時はいつも)、「私」は早寝をした、のであって、早寝をしてきた、のではないのである。このように過去に何回も繰り返された習慣でも、過去の一事実として、現在にはもはやない事実として単に提示しようとする場合は、フランス語は半過去ではなく、単純過去、あるいは複合過去を用いる。

Tous les jours, à cette époque-là, je me suis couché tôt. (当時私は毎日早寝をしたものだ) というような日常よく聞かれるフランス語と、Longtemps, je me suis couché de bonne heure. という文に用いられている複合過去は同じ使い方である。小説の語りの部分などにおいては、この複合過去は単純過去と交換可能であるが、単純過去と複合過去の違いはここでは意味の違いというよりは、過去の「私」と語っている現在の「私」が断絶しているか、継続しているかの違いである。ところでこの場合、複合過去のもつ継続性とは、述べる者と述べられた事との間の心情的継続性であって、「... (して)きた」という日本語で言い表されうるような、行為の継続性ではない。

この物語を初めて読む読者に語りかけ、その心を引きつけるためには、単純過去の持つ歴史書のような冷たい客観性ではなく、複合過去によって、語られた事柄と語っている人間との間の心の連続を示すことが有効だったのである。この客観性から主観性への変化は、『ジャン・サントゥーユ』の三人称性から『失われた時』の一人称性の移行のもつ意義に関しても言えることであるが、この冒頭は je (私)の使用と複合過去によって二重に親しみのある文となったのだ。

Depuis longtemps, je me couchais de bonne heure (...). というフランス語はカッコで示したように、(前)後に主文とも言うべき文章が存在するという条件の下ではありうるだろう。しかしこの半過去で書かれた文の意味は、複合過去で書かれたプルーストの冒頭の文とはまったく違うものである。

井上氏の「訳者メモ」には、この冒頭は「なんの抵抗もなしに〈長いあいだ、私は早くから寝ることにしていた〉と読み流すようには書かれていないのである」とあるが、この日本語もプルーストの冒頭の訳としては不十分と思われる。このいきなり「過去の私」の状況へ読者を引きずり込むような文意からして、この訳は、半過去を想って訳さ

れた観が強い。井上氏がこの冒頭の複合過去が半過去の代わりであるという思いを捨て切れなかったことは、次のような氏の言葉に表れている。

「なるほど *longtemps* は〈長いあいだ〉であって、〈長いあいだに〉となるには *depuis longtemps* とすべきである(...)しかしこの開巻第一行ではわざと *depuis* を省き、(...)動詞が半過去となる習慣(下線筆者)を裏切って、複合過去を用い、読者をしばらく突っ立たせようとしたのだ。」氏の「長いあいだに、私は早くから寝るようになった」という奇妙な訳(フランス語ではこれを *J'ai mis longtemps à prendre l'habitude de me coucher de bonne heure.* とでもいうべきか?)は、この、動詞が半過去となる習慣という恐るべき思い込みから生まれたものであることは疑う余地がないように思える。だいたいこの最初の語である *Longtemps* は *Depuis longtemps* と解すべきではなく、当然 *Pendant longtemps* と解すべきである。井上氏は複合過去の訳として、ゆるやかな時間の経過、継続を表そうとするかのような「... (する)ようになった」という言い方を好まれていて、訳文7ページ、「私はサン・ルー夫人の田舎の家の、私にあてられた部屋にいたのであった。(...)というのもコンブレーで過ごして以来、多くの歳月を経るようになったからだ」や、273ページ、「そうした複合的なこの森(ボワ)の性格を、私は今年、11月初旬のある朝、トリヤノンに行くためにそこを通りすぎながら、改めて知るようになった」と訳しておられるが、このような訳も、冒頭の複合過去の独特な訳し方に由来しているものであろう。

思うにブルーストは、「動詞が半過去となる習慣を裏切って、複合過去を用い、読者をしばらく突っ立たせようとした」のではなく、過去のある時期における話者の習慣を読者に親密な形で語りかけたのに過ぎない。この冒頭は *Je me suis (pendant) longtemps couché de bonne heure.* というような普通の語順の文と比べると自然ではないところもある文章ではあるが、この不自然さの効果ももちろんブルーストは計算済みであろう。とにかくブルーストにしては異常に短いとも言えるこの文章は、いわば過去のある風景を映し出す窓枠のような役割を果たしているとみることができる。そしてこの窓から見える、あるいはこの窓によって切り出される過去の風景とは、話者の少年時のコンブレーで繰り返された風景に他ならない。つまりこの冒頭は「スワン家の方へ」の第一部「コンブレー」全体にかかる、あるいはコンブレーに象徴される少年時代すべてを統括している副題なのである。あるいはドウブロウスキーの主張するように、この短い冒頭には、「失われた時」のすべての要素が凝縮されているという見方も可能なのかも知れない。このような性質の副題は『失われた時』の中にも見られるし、普通の作文でもしばしば見られるものである。例えば、「動物園」と題して小学生が作文を書く。「ぼくはきのう動物園に行った。ぼくはきのう父と多摩動物園へいくため、新宿で京王電車に乗っ

た。電車は日曜なのにだいぶ混んでいて...」などという文の冒頭「ぼくはきのう動物園に行った」という句は、多分この動物園来訪記の副題と考えることができるものであるが、過去において繰り返されたことを述べている点を除けば、『失われた時』の冒頭もこれに似たところがある。少なくともこの冒頭は「ときに蠟燭を消すとまもなく...」で始まる寝室と不眠の描写に直線的につながっているのではない。読者はこの「蠟燭を消すとまもなく」で始まる半過去を主体とした描写になってはじめて寝室の情景の中に入り込み、もう窓枠の存在は見えなくなるのであるが、冒頭の一句だけではまだその情景そのものの中に入ることは許されず、情景と同時にその情景を提示する窓を読者に提示している存在を認識することが要求されているのである。

ここでよく考えて見れば、情景の中にある「私」とは「語られている」私であり、窓枠を提示した存在は語る私であることに気付かざるをえない。そして「語られている私」の早寝の習慣は「語る私」にはもうなくなっているのであろうということにも気が付くはずである。実際、読み進むにつれて、夜起きて昼寝するという、コンブレーを思い出した頃の早寝の「私」とはまったく逆の生活をしている「語る私」の存在が明確に浮かび上がってくる。この相互にからみ合いながら、適度の隔たりを維持している、この二つの(あるいはそれ以上の)「私」の存在はつとに指摘されていることであるが、この「語られる」ということと「語る」という行為は、すでにこの冒頭の構造で巧妙に表されていたのであった。このような「語る存在」を翻訳で読む読者に察知させるためには、「長い間、私は夜早く床についたものである」というような、いわば突き放したような訳によらねばならないのではないだろうか。このような訳によってこの意味の逆、すなわち「今の私にはそういう習慣はもはやない」という必要な言外の意味が生まれうるのである。

複合過去が持ちうるこの二つの相反する意味は、この小説の最終章と冒頭とをほとんど直接的に結びつけることになる。この小説が最終章から冒頭に帰る、あるいは円環をなすと言われるのは、小説の最後の語である Temps と、冒頭の Longtemps だけで暗示されているのではない。この冒頭の真の意味を理解するためには、最終章の、また命が長らえて、これから新しい物語を始めようとするシェラザードの姿を思い浮かべてみる必要があるのだ。

「語られていた私」が終局を迎えた瞬間、場面は幻灯を見るように冒頭に移り、「語られていた私」は「語る私」に変化して「私」を語り始めるのである。この変化はまた、「眠るためのベッド」から「物を書くためのベッド」への変化でもあり、昼夜の逆転でもある。この小説の構造の倒錯は、プルースト自身の本性とどのように関係しているのだろうか。

*これは雑誌《ふらんす》(白水社)1980年1月号に載せた「プルーストの暗い部屋」と題した拙文の中の「《失われた時》の入口」という一節を発展させたものである。この小論は1980年10月刊行の『明治学院大学論叢フランス文学特集』に載せた。

*なお、『失われた時を求めて』の日本語訳はそれ以後、井上究一郎による新訳(ちくま文庫1992年)、鈴木道彦による全訳(集英社)がある。冒頭の一句の訳は、井上新訳では「長い時にわたって、私は早くから寝たものだ。」、鈴木最新訳(集英社文庫2006年3月)では「長いあいだ、私は早く寝るのだった。」 2008年3月

上の1980年の日本語による小論の九年後、ルモンド紙に『失われた時を求めて』の冒頭の翻訳(英訳)について「プルーストを再英訳しようとする者は誰?」と題したジル・バルブデットの次のような記事が載った。

Mais qui ose retraduire Proust en anglais?

("Le Monde" vendredi 13 janvier 1989)

Depuis que Proust est «tombé dans le domaine public» en octobre 1987, tout éditeur étranger peut commander une nouvelle traduction. En anglais, la vieille traduction de Scott-Moncrieff avait fait ses preuves. Avant d'être remise à jour et corrigée en 1981 par Terence Kilmartin d'après l'édition de la Pléiade de 1954, cette traduction était déjà la plus célèbre dans toute l'histoire de la littérature traduite en langue anglaise. Sans Scott-Moncrieff, cet officier en retraite qui réussit à convaincre Chatto and Windus de publier en 1920, *Swann's Way*, le premier volume de l'ensemble intitulé *Remembrance of Things Past*, par allusion à un vers du trentième sonnet de Shakespeare - ce qui transplantait d'un coup la *Recherche* au coeur de la littérature anglaise, - Proust n'aurait

pas connu aussi tôt, et aussi définitivement, une gloire absolue dans les pays anglophones.

Des générations d'écrivains anglo-américains n'ont cessé de louer la beauté du travail de Scott-Moncrieff. Proust, lui-même, dans une lettre à son traducteur, se disait impressionné par la traduction de *Swan's Way*, même s'il avait un doute (justifié) sur la traduction du titre général. En effet, ce *Souvenir des choses passés* ne traduit pas *A la recherche du temps perdu*, qui aurait dû être, plus simplement: *In Search of Lost Time*, ce que proposerait d'ailleurs Terence Kilmartin et la plupart des spécialistes anglo-américains de Proust. Mais comment changer un aussi beau titre?

En 1981, les éditeurs Chatto and Windus et Random House décidèrent de conserver le titre de cette traduction révisée. La critique salua de manière unanime le travail de Terence Kilmartin qui a traduit, outre un choix de lettres de Proust, des romans de Malraux et de Montherland et dirigé, pendant vingt ans, la rubrique littéraire de *l'Observateur*.

Richard Howard, traducteur américain d'une bonne centaine d'ouvrages français dans tous les genres, de Barthes à Foucauld, en passant par Robbe-Grillet et de Gaulle, a décidé qu'il y avait là une occasion à saisir. Avec le concours de Farrar-Straus-Giroux, son éditeur, Richard Howard a décidé de tout traduire et, il y a quelque temps, la *New York Times* présentait une version comparative du premier paragraphe de l'original proustien, avec la traduction Scott-Moncrieff-Kilmartin et celle de Richard Howard.

«For a long time» ou «Time and Again» ?

Personne ne saurait contester l'immense culture de Richard Howard, poète érudit, qui fut lauréat du prix Pulitzer en 1969, il est également l'auteur d'une remarquable traduction des *Fleurs du mal* de Baudelaire, sans doute sa plus grande réussite de traduction.

Mais y avait-il urgence à «s'attaquer» à Proust, sous le prétexte que posséder deux traductions serait une manière «d'enrichir Proust» ? Certes, cette initiative montrera un peu plus que Proust est le grand géant solitaire de la littérature française et que la traduction est un travail infini, certes il y a des fautes dans la version canonique, même révisée par Kilmartin. Mais il y en aura dans celle de Richard Howard. Il y en a déjà.

La fameuse première phrase: «Longtemps je me suis couché de bonne heure, est suivie de ces imparfaits qui ne laissent aucun doute sur l'évocation d'une récurrence dans le passé. Scott-Moncrieff avait traduit très exactement: «For a long time I used to go to bed early.» On pouvait trouver ce «used to» un peu lourd. James Grieve, un traducteur australien de Proust avait suggéré: «Time was when I always went to bed early.» On aurait pu tout aussi bien modifier légèrement la solution Moncrieff et dire: «For a long time I went to bed early.» Richard Howard propose lui: «Time and again, I have gone to bed early.» On pourra ergoter sur le fait que le «present perfect» anglais n'est pas le passé composé. Mais en tout état de cause, «time and again», c'est «maintes et maintes fois» ou «à de nombreuses reprises», sûrement pas «longtemps» .

Richard Howard ne retient que la fréquence dans son expression et non pas la durée. Chez Proust, il y a les deux. La grammaire proustienne n'est certes pas un cadeau de Noël, même pour un traducteur averti. En proposant une nouvelle traduction de Proust, Richard Howard ne manquera pas d'affûter l'esprit critique des deux côtés de l'Atlantique (et de la Manche) et il n'aura pas l'excuse du duc de Châtellerauld, rencontré par le narrateur devant l'hôtel de la princesse de Guermantes et qui, pour échapper à un huissier, clamait tout le long de l'avenue Gabriel: «I do not speak french.» Car le français, évidemment, Richard Howard le parle très bien.

Gilles Barbedette.

(Mis en italique par l'auteur du présent article)

22) Fichage biométrique : une voix japonaise

Il nous manque des voix japonaises. Quand la biosphère bruisse des échos de nombreux extatiques Occidentaux mais aussi d'autres Asiatiques amourachés du Japon, rêvant à haute voix d'y venir voir, d'y vivre, entretenant une fois sur place l'onirisme ultra-contemporain dont le pays, en tout cas sa lecture adolescente souvent obtuse, fait l'objet, ce sont les Japonais qui sont les grands absents, hormis dans les descriptions de foules, de masses. On les aperçoit à l'occasion en photo, portant fanfreluches à Harajuku, ou kimono de cérémonie, ce qui est identique puisque l'intention est de typifier l'autre, de le placer dans un contexte anonyme où seul compte "la couleur locale".

C'est ainsi qu'on les veut, c'est donc ainsi qu'on les cadre dans l'objectif. Ces "ils", les Japonais sont des images, très rarement des voix. L'autre adulé, nimbé de mystère, un peu source d'envie, de jalousie, ou voire même critiqué dans sa masse est tout d'abord aphone. Et s'il est aphone, c'est d'abord parce qu'il est rendu ainsi par son descripteur qui garde ce faisant toute la maîtrise de son discours sur son objet d'intérêt, d'adulation ou tout autre sentiment. Le Japon, dans cette description de soi par d'autres que soi, dans cette exégèse qui diffuse par tous les pores des média ailleurs répétant à gogo la litanie des anecdotes bizarres ou cools de ce pays "trop fort", où même les suicides comme fait statistique sont rapportés au niveau de l'engouement pour le Beaujolais Nouveau, une brève le rire en moins, puis on passe à la séquence suivante, le Japon en ressort un peu plus affabulé qu'avant l'Internet, mais toujours autant sans voix, sinon que celles des auteurs traduits redondants, et des inévitables réalisateurs de film invités de marque dans les festivals de cinéma.

On peut voir un paradoxe que ce soit dans la seconde décennie de cet engouement pour la chose nipponne, alors que le nombre de touristes ici ne cesse globalement de croître, que se produit dans le sillage des USA l'introduction, non, l'intronisation du fichage biométrique sélectif des étrangers, les premiers suspects, et comme il n'y en a pas d'autre, les seuls suspects donc. La période est propice à exploiter l'aphonie d'un côté, l'enthousiasme de l'autre. Dans les commentaires des forums en ligne nippo-obsédés, il

est terrorisant de découvrir la proportion de plus japonais que les japonais qui votent pour la Pax Nipponica à fichage numérisé, exposant dans des interventions écrites brèves de la durée moyenne d'attention une inculture historique, une puérité de dépolitisés, de suiveurs des tendances massives qui devrait donner du baume au coeur des autorités locales. Ces votants pour, objets eux-mêmes de cet ostracisme informatisé, ne font sans doute pas partie de la classe affaires, celle pour qui l'inconvénient du fichage se traduit en risque de retard, en interférence avec l'heure de la réunion du board à Tokyo, Osaka ou ailleurs. A eux, on leur donnera des queues classes affaires, et puis aussi des queues de première, payées donc plus rapides. Il nous manque des voix japonaises. En voici une, expressément sollicitée, gracieusement et puissamment offerte par Susumu Kudo, professeur de français à l'université Meiji Gakuin à Tokyo.

Honte et Ignorance

J'ai envoyé un courriel de protestation à un quotidien de Tokyo, au moment de la déclaration idiote de notre ministre de la Justice (Hatoyama le cadet), qui a insisté sur la nécessité de la mesure de fichage biométrique, en alléguant d'imaginaires terreurs qui seraient causées par le parcours libre, sur notre sol, des terroristes étrangers! Le ministre offre un bel échantillon des cerveaux embrumés des anciens élèves de la Faculté de Droit de l'université (impériale) de Tokyo. Le quotidien ne m'a rien répondu. Voilà nos média japonais et nos soi-disant intellectuels qui, tout en feignant l'innocence, ignorent ce que pensent et sentent en vérité les étrangers. Leur incompetence à la compréhension est presque criminelle.

Il est pitoyable de voir notre gouvernement bomber le torse en déclarant qu'ainsi, la sécurité de notre pays sera assurée. C'est tout simplement que la mesure est calquée sur celle des Américains qui, en application depuis plus de trois ans, n'aurait donné aucun résultat significatif. La mesure ne fait que réjouir les fabricants d'appareils électroniques dont ont besoin massivement les douanes japonaises. L'achat de ces engins humiliants à la seule fin de déranger les étrangers aurait coûté 3 milliards 500 millions de yens (22 millions d'euro). C'est une HONTE que ce mimétisme servile, si souvent réitéré, dans notre politique étrangère.

Le jour d'entrée en application de la mesure (le 20 novembre), j'ai demandé, par courriel, à notre secrétaire de me dire si, dans ma Faculté où la plupart de mes collègues s'occupent d'études étrangères, quelqu'un se serait avisé de protester contre cette mesure, auquel cas je serais prêt à y adhérer. Sa réponse : *Pour le moment, personne n'en parle. En ce temps de grippe, faites bien attention à vous!*

Au temps des essais nucléaires français dans le Pacifique de sud, nous avons publié une belle formule de protestation et écrit au président français ! Aujourd'hui, le temps n'est pas à la grippe mais à l'oubli paresseux, au repli honteux, à la nonchalance irresponsable. Je ne peux m'empêcher de me dire que les Japonais se dégradent, vraiment.

Il y avait chez nous un bon mot : maré-bito. C'est maré (naru) hito « celui qui apparaît rarement », c'est-à-dire, un hôte étranger, xénos en grec ancien. Les marébito avaient toujours droit à être bien accueillis partout où ils se présentaient. Les gens qui venaient de loin devaient être toujours bien traités comme au temps homérique. (Nos étudiants à Limoges sont très bien accueillis comme autrefois). On donnait des présents (tà xénia) aux gens qui repartaient. Ulysse est rentré chez lui, comblé de présents. Ce genre d'hospitalité se faisait aussi au Japon jusque récemment. Vous devriez lire le roman intitulé *Yoakémaé* « Avant l'aube » de l'écrivain Shimazaki Tôson, ancien élève de Meijigakuin.

L'histoire se passe dans le fin fond d'une province japonaise entre la fin de l'époque Edo et le début de Meiji (1850 - 1875). Les habitants de mon pays du nord (Akita) ressemblent un peu aux gens du centre du Japon d'autrefois, si bien décrits par Shimazaki. Ils ont du mal à s'adapter aux changements rapides et fous qui se déroulent actuellement. Ils ont un penchant naturel au repli. Les élites politiques du centre du pays en profitent. Ces derniers, modernes, ont un certain penchant xénophobe, réflexe du temps des bouleversements du début de Meiji. Ils se sentent étrangement outragés, snobés par les Occidentaux, surtout par les Américains. D'où le complexe ambivalent d'amour / animosité envers les Etats-Unis, le seul pays avec lequel nous serions censés avoir des relations « internationales ». Notre gouvernement, empressé à vouloir plaire aux Etats-Unis, semble oublier que la meilleure garantie de la sécurité d'état, c'est l'hospitalité

(hê xenia).

S. Kudo, Tokyo

(FeedBlitz 24 / 11 07)

23) フランス語のなかのテロ

テロを表すフランス語

フランス語にはラテン語起源のattentat (本義はtentative 〈企て〉) という語がある。これがいわゆる日本で現在言われている「テロ」と同義である。フランスでテロを指すメディア用語は terrorisme ではなくこの14世紀頃から用いられている attentat のほうである。terrorisme にしろ attentat にしろ、政治的主張を感じさせるものでありながら、これが日本語ではひとしなみに「テロ」と呼ばれ、それには「けっして屈してはならない」ものとして国民に提示されている。しかもこのテロ行為から政治的意図を抜き去り、「(テロは)それが目的でしかない非常に無責任な暴力(..), もともとテロリズムは、守るべき信義をもっていない、非常に無責任なもの」と説明した知事がいるが、テロはそれ自体が目的なのではなく、かならず政治的な意図があるという意味で、これはテロリズムの本義ではない。

政治的手段としてのテロリズムという語が使われはじめたのは、ロベールの辞書によれば、フランス革命の大恐怖時代(La Terreur、1793年から94年にかけて)以降である。テロリスト(terroriste)、動詞 terroriser(恐怖で震え上がらせる、初出1796)も同様だ。この辞書は、もう一つの動詞terrifier (震え上がらせる)も1794年を初出としているが、ラテン語 terror (恐怖)やterreo(震える)から派生している terrible (恐ろしい)が12世紀、また明らかにterrifier を前提としている形容詞の terrifiant(恐ろしい)は16世紀には用いられている。

テロの語源であるラテン語 terror, terreoの語根は、ラテン語語源辞典によれば、印欧語根*ter- (震える)。英仏の tremble(r) (震える)、英語のtremendous (恐ろしい), tremor (恐怖、震え)などは、この*ter-を語根とするラテン語 tremo (震える)に発する。辞書の初出は文献上のものなので、実際用いられた時期はそれより相当さかのぼるのがふつうだが、terrifier はterroriser より明らかに古く、一方terroriser はおそらく terrorisme, terroriste という言葉と同時に使われはじめたのだと推定できる。つまり、「テロ」という言葉は18世紀末以降ということになり、「テロ行為」とはもともとフランス革命中の殺人暴力を背景とした政治行為そのものであった。

「抑止力」force de dissuasionということがよく言われた。この「力」は倫理的な力ではなく、軍事力であることは言うまでもない。さらにこの力は対象側ではなく、主体側の

必要から「行使」することが前提となっている。つまり「抑止力」とは、人を「(暴力で)震え上がらせて言う事をきかせる力」force de terrorismeにほかならない。このテロはよかれあしかれ現在世界でふつうに行われている政治の方法である。世界はまさにこうしたテロに屈してはならないのに、多くの国や人が服している状態が現状ではないか。

もう一つのテロ

興味深いのは、テロ行為をあらわすもう一つのフランス語の由来である。フランス語には16世紀のイタリア語から入ってきたとされる assassin (暗殺者)という語があるが、この暗殺行為を assassinat (英 assassination)「暗殺」と称する。ラルースのある辞典によれば、assassin という語は十字軍に苦しむ中世のイスラム世界にさかのぼり、buveur de haschisch (大麻吸飲者)というのが原義とされているが、13世紀にはすでに assasis という形で本義(暗殺者)に、また比喩的に用いられていた。旧ロベール大辞典には、「= Haschischin暗殺者、殺し屋(16世紀のユマニスト、アンリ・エチエンヌの記述)。ハシシュ(大麻)吸飲者。シリアのイスマイル派(シーア派)に与えられた名。彼らは十字軍の期間、多くのキリスト教徒およびイスラム教徒を殺害した」という語義の後、ヴォルテールによる次のような説明がある。「十字軍の騎士はアラブの山人の長を〈山のおやじ〉と呼び、これを大守とみなしていた。この長は、モンフェラ侯(チュロス港の主権者)のような人物やほかの十字軍の諸侯を公道で強殺したからである。彼らはアッササンと呼ばれた。この〈山のおやじ〉の話は600年ものあいだ、くり返し語り継がれた。彼はエリート青年を自分の甘美な庭園に呼んで悦楽を味わせたあと、永遠の極楽に値させるため世界の果てまで送りだし、王侯を暗殺させた」。

これによるとアッササンはまさに現代の自爆テロリストである。〈山のおやじ〉の話が600年も語り継がれたとすれば、ちょうどヴォルテールのころまでだ。この〈おやじ〉は同一人物ではなく、抵抗の象徴として語りつがれたのに違いないが、今日も誰もがただちに思い浮かべる〈山のおやじ〉がいる。

テロリズムは少なくとも十字軍が始まった11世紀においてすでに現代的な姿で、しかも極めて政治的な側面をもって存在していた。国家として200年を少々超える歴史しかないアメリカと違い、フランスはこうしたイスラム世界と大昔から交渉があった。イスラム圏とキリスト教圏の最初の大規模衝突であるポワチエの戦い(732年)から数えると、その交渉は優に1200年をこえる。

テロとアッササン教団

1993年、『タニオスの岩山』でゴンクール賞を受けたAmin Maaloufは、その十年前の83年に『アラブ側からみた十字軍』を出版している。このタイトルは本の内容を言い表わしているが、副題に「聖地におけるフランク人の蛮行」とあるように、今から900年前の十字軍時代からはじまるイスラム世界でのヨーロッパ人(特にフランス人)の残虐行為を、当時のアラブ側の歴史家、年代記作家の記述、日記などに証言を求めて描いたものである。著者のAmin Maaloufはレバノン生まれのパリ在住者で中近東のすぐれた専門家として知られている。名前、風貌からしてアラブ風だが、こういう人をすぐ自国文化にとりこむ現代のフランスはしたたかである。

さてヨーロッパから来た人間は当時のイスラム世界では「フランス人」Faranj, Faranjat, Ifranj, Ifranjat などと呼ばれていた。この『アラブ側からみた十字軍』では、今でもヨーロッパ人を指すのに用いられているというFanjを用いている。フランス人がヨーロッパ人を代表しているということは、当時の兵員のなかで、フランスからの人々が圧倒的に他の言語の兵員を上まわっていたからだろう。アラブの歴史家たちは、「フランス人」の野蛮(とくに医学知識の低劣さ、稚拙、残酷な処罰制度、不寛容など)を描いているが、これはまさに現在のアフガニスタンやイラク人を見る、「先進国」の人たちの憐憫にみちた目を思わせる。当時のイスラム社会はヨーロッパ社会よりほとんどあらゆる点で進んでいたことを私たちは知っているが、こうした反対側からの視点にあうと、まるで聞き知っただけの過去の国に、時間をさかのぼって実際に訪れる感がある。

Amin はさらにアッササン(テロリスト集団)について書いている。イスラム側からみたアッササンとは一体どのようなものか。第一回十字軍(1096-1099)がはじまる前の1090年、イスラム世界の「歴史のなかでもっとも恐るべきアッササン教団(シーア派)」をつくり上げた男は、現在のテヘラン近郊に生まれたハッサン・アル=サーバという人物である。教団の創立年代は第一回十字軍襲来はかなり前だから、この教団は十字軍襲撃の目的で創立されたのではない。当時はスンニー派が権力を握った時期であり、アッササン教団はこのスンニー派に対抗して生まれたのである。

「教団員は、教養、信頼性、勇気の程度により、見習いから団長まで分けられ、教義ならびに肉体の訓練を集中的に受けた。敵を〈震え上がらせるため〉ハッサンの選んだ方法は暗殺である。教団員はそれぞれ、名指された人物を殺す役目を持ち一人で派遣されたが、二三人の小グループになることもあった。彼らはふつう商人あるいは苦行僧に変装してテロの現場となるべき町を巡り、狙った人物の場所と日常とを熟知する。(..)暗殺の準備は隠密裏に進められるが、決行はできるだけ多くの公衆の前で行われた。場所はモスク、時は金曜日、正午が選ばれたのはそのためである。暗殺は単に敵を消す

方法ではなく、狙った(高位の)人物に罰を下したこと、また〈フェダイン〉と呼ばれる特攻者の犠牲は崇高であったという、二つの教訓を人に示すことであった」。

Aminはハシシュ吸飲説には懐疑的で、そういうものも行為の補助として用いたかも知れないが、原動力ではないという立場である。対立派からもシーア派からも嫌われたこの原理集団は、むしろキリスト教徒と友好関係があったほどだが、しだいに内外の政治経済勢力の武器となっていく。サラディン王(スンニー派)は自分を襲ったこともあるこの教団を懐柔し、自分の味方につけようとしているし、獅子王リチャードはこの教団を使って同じ十字軍側の大侯(モンフェラ侯)を暗殺させた。

Aminは、同盟を結びに教団の砦に出かけたエルサレムの主権者、アンリ・ド・シャンパーニュ侯の会見のもようを次のように述べている。「教団長はフランク人の客に自分の権威を証明するため、二人の団員に城壁の高みから飛び下りることを命じた。するとその二人は一瞬のためらいもなく命令に従った。団長はなおも続けようとするのでアンリは懇願してやめさせねばならなかった」。同盟締結後、さっそく教団側は相手に暗殺の注文を聞く。十字軍はキリスト教圏内の略奪集団(1204年、コンスタンチノーブル略奪)に変質する一方、教団は暗殺を商品化していく。この過激な行動の背景には西欧の圧力で変化するイスラム社会があるはずだが、教義と活動に関するペルシャ語による教団記録が13世紀中葉モンゴル軍によって破壊され、アッササン教団の本質は明らかではない。

テロリズムは政治目的をもった暴力である。制度化されたこの方法はイスラム世界で栄えた後、眠りに入ったが、現在決定的によみがえったのではないか。この「卑怯な」方法は十字軍その他を通じてヨーロッパに伝わり、今や国の大小を問わず「抑止力」として普遍的なものになっている。集団の自衛手段としての個人死の歴史は太古にまでさかのぼる。めざましい武器をもたない者の攻撃手段でもある自死のテロを誰が止められるのか。フランスは20世紀に第一次、二次、アルジェリア戦争と自国領土を戦場とする三度の戦争を経験している。第一次大戦では男子活動人口の割を失い、18歳から27歳までの男子は四人に三人が死傷者となった。二次では戦死者は一次に比べて少ないものの、ドイツ軍による占領を経験し、性格のあいまいなヴィシー政府軍を背景に、内戦に限りなく近いレジスタンスを戦った。ベトナムの泥沼から抜け出てほっとするまもなくアルジェリア戦争があった。20世紀で初めてイスラムのテロリズムと事を構え敗退した国はフランスである。その教訓は生かされねばならない。

テロには必ず相当の政治背景があることを、現在身をもってよく知る国はフランスである。「フランスは甘えている」と言った大臣がいたが、甘えているのははたしてどちらか。テロを絶対悪とした単眼的対処では決してうまくいかないだろう。

(2004年3月『ふらんす』白水社)

24) 入国外国人への指紋押捺・顔写真の強制

J子さん

あなたの言われることはよくわかります。私の文章は、フランス語（あなたに送ったもの）が原文です。英語や日本語にも翻訳されているようですが、あの文章で問題にしたかったことは二つ。一つは入国管理局の措置は、いわゆる「人権」という普遍的な人の権利に抵触していること。もう一つは、日本の法務大臣がこの措置を実施するにあたり「日本領土にアルカイダのメンバーが自由に出入りしている」という虚偽に近いことを理由にしたことです。「人権」に関して法務省の見解は明治時代とあまり変わっていません。人口の2パーセント以下の外国人の犯罪率がもし異常に高いと言うのなら（私はそうは思いませんが）、その内容を示した上で別の対策を講じるべきです。また生体情報を記録保存するというのなら、外国人だけでなく日本人にも強制しないと外国人の納得は得られません。

国籍や外見、言語で人を分けることには長け、普遍的人権という観念の薄い日本人については、藤村先輩の「夜明け前」を読んでもたらどうですか？日本人の外国人に対する差別的視点は維新のころと本質的には変わっていないどころか醜悪にさえなってきました。人間（外国人であろうが日本人であろうか）というものの法的権利に敏感であるべき法務大臣が、この程度の人である国の将来は暗い。こうした日本の国際化は、国籍や言語の違いをもとにして、差別をいたずらに助長するだけです。先日テレビで、入国手続きのときに「日本人に化けてトランジットするアジア人がいるから、（顔つきを観察するだけでなく）日本語で呼びかけてみよう」と教官が入国管理官に教えていました。日本語の話せないアジア人に要注意、ということでしょう。なさけなくなりました。

ルモンドのブログで出たこの文章に、日本でも外国でも賛同してくれる方は多いのですが、あなたのような方向で考える方も多く、仏文研究室に貼ってあるあの文章が消えることもありました。

テロの本質については「フランス語のなかのテロ」と題して、雑誌『ふらんす』で論じたことがあります。明学の私のサイトの項目12) に埋め込まれていますから、興味がありましたらクリックしてみてください。Google でも私の名前で検索できます。

出入国時の生体情報のリスト化を始めたのは日本がアメリカについて世界で二番目だそうです。記録をどのくらいのあいだ保管するのか、アメリカとの共通化があるのかないのか、というような点をうやむやにしたままこうした方法を導入しています。アメリカはこの方法を他国にもすすめたが、どの国も従わず、従ったのは日本が初めて、それもアメリカの3年後にです。

この方法はテロ対策には役立たないとされていました。こうしたときにテロ阻止を言い出したわれわれの法務大臣は人をバカにしているのでは、と私は思います。あなたが言うような犯罪減少効果があるのなら、テロ対策ではなくそうした通常の犯罪対策を理由にすべきです。自爆テロは通常の犯罪ではなく政治的行為です。

9・11を実行した人は、アメリカに長期滞在していた人。いわば「人種のるつぼ」と言われているアメリカ文明の産物です。張本人と言われている Ben Laden もフセインも以前はアメリカの味方だったことは周知の事実。現在もアルカイダを支える資金はアメリカを中心とする世界経済に投資され、アメリカやスイス（の銀行）からいろいろ迂回してテロリストに渡っているのだそうです。現代のテロ事情は力（金融、軍事力、オイル）の論理を基盤にした現実の裏面です。

自爆テロの実行者は前科のない者が多く、死ぬことが成功なのですから、幽霊にでもならなければ何回も他国に出入りするはずがありません。新聞によればアメリカのこの方法は3年やったが効果はないらしい。あたりまえのことです。自爆テロに走る人を、こうした方法で抑えることができるだろうか？あなたのところに入った（外国人かもしれない）泥棒が、テロ対策措置で捕まると思いませんか？これに反対する日本の外国人の多く（家族の誰かが外国人）は、

なぜ日本人と外国人と分けるのか、と言っています。なぜ日本人の出入国の際、指紋採取、写真撮影を強制しないのかと。このほうがあなたの泥棒の捕まる確率はたかまります。

日本でのテロ（的）行為は外国人によって行われたことはほとんどありません。幕末の生麦事件から始まって、オウム事件に至るまで、テロ行為の実行者は外国人ではなく日本人でした。フランス語でも英語でも、自殺攻撃をカミカーゼという日本語を用いますが、こうした日本でテロを含む潜在的犯罪者とみなされ、生体データが保存されてしまう外国人は不愉快でしょう。外国人の語源はギリシャ語の *xenos* ですが、*xenos* とは「客人」です。人を認識することを機械にまかせ始めた現代文明は、「友」を「敵」に変えてしまいました。自爆テロは武器を持たない者の最終攻撃手段であり、これを防ぐことはできないのです。つまりテロに対する最良の防御は、他者をそこに追い込んではいられないということです。

最近の日本で恐ろしく感じるのは、なにか未解決の事件や恐ろしい事件の犯人を、まず外国人ではないかと想定すること。先日、長崎の佐世保で銃を乱射し、二名の死者と多くの負傷者を出した事件がありました。犯人は逃走し、後に自殺した姿で見つかりましたが、犯人は「縮れ毛で、黒い（つまり黒人）」という情報が流れました。実際は正真正銘、だれがみても日本人。今日の新聞にも警官が線路に突き落とされて重傷、犯人は二名の中国人、というのがあります。これも実際はかなり違ったものではないかと思いますが、外国人を恐れるこうした感情こそ恐ろしい。

私が大学生のころ、学長は朝永振一郎という物理学者でした。彼はパグウォッシュ会議という、核兵器廃絶のための科学者の世界会議で重要な仕事をしていましたが、彼は「米ソの激しい核武装競争の根底には相互の強い不信、恐れ、の気持ちがあった」と言っています。こうした他者に対する恐怖心が核兵器という究極の殺戮兵器を生み出したわけです。人間が絶滅するのは地球の環境変化以前に、他者への不信と恐怖によるものでしょう。こうした心情を助長させるものでしかない今度の日本政府の措置には絶対賛成できません。

あなたの同期の岩波のNさんは「これはアクセンチュアを儲けさせるだけ」と言っています。この「アクセンチュア」という会社は、あなたの同期の岩波のNさんは「これはアクセンチュアを儲けさせるだけ」と言っています。この「アクセンチュア」という会社は、アメリカから大西洋バーミューダ諸島に本拠を移し、IT 通信、コンサルタント業務ソフトや登記情報システム開発などを専門にしている企業です。アメリカがその出入国管理システムを採用し、日本も、日立を通じて採用を決めました。アメリカは戦争さえ民営化していますが、日本も防衛や犯罪阻止という、異論がでにくい分野を民営化、つまり商業化しようとしています。この方法でアメリカは世界の一元化を狙っているのではないか。十字軍の頃からある「自爆テロ」を犯罪とみなす視点と、テロ活動阻止のためと称して、インド洋での米軍を中心とする艦船への給油活動を当然視する視点とは同じものです。

もてなし、自衛、友情、愛、弱者へのいたわり、本来取引されるべきではないこうした人間的なものがすべて民営化され、他者によって管理されています。現代は、本質論がないまま表面的、対症療法的に犯罪捜査、対策、阻止、ということさえ商業化される社会です。教育という、取引とは遠いものであるべき分野がもっとも商品化されている国がアメリカと日本です。大学の授業料がこれほど高い国はありません。基本的には（少数の私立学校を除いて）授業料のないフランスはこの点では頑張っています。しかし日本からフランスに行く最近の留学生のなかには、日本的（アメリカ的）価値観に少しの疑問を持つこともなく戻ってくる人がいます。なんのための留学だろうか。

政府には、世界（アメリカだけかな？）に尊敬されなくてならない、という固定観念があるようですが、この政府が、世界の現実と大きくずれていることに気付いていないように見えるのは悲しい。 くどう 2007年 12月24日

25)

Le cauchemar de G. Orwell

Le 18 / 01 08 Tokyo

"Comment analysez-vous le fichage biométrique imposé par l'administration japonaise à l'encontre de tous les étrangers arrivant au Japon, y compris les résidents?"

- Lionel D. -

Oui, évidemment, c'est une infraction aux droits de l'homme. Et si la démocratie est constituée de ces libertés fondamentales de l'homme, cette infraction porte atteinte à la démocratie.

Ce qu'il faut combattre, c'est cette idée que les contrôles aux frontières sont sinon permis, du moins supportables lorsqu'il s'agit de maîtriser le terrorisme. Or, le mot « terrorisme » fait peur. Tout le monde se tait. On a peur. Et c'est cette peur qui fait accepter au public la réglementation de plus en plus contraignante.

Et notre ministre de la Justice a exploité cette peur populaire pour instituer le système, en alléguant d'imaginaires terreurs sur notre sol. Nous, on sait que le système n'a pas produit d'autre effet que de dévoiler de petites fraudes à la douane pour lesquelles on ferait mieux d'imaginer d'autres choses que le fichage biométrique.

Je ne suis pas sociologue ni philosophe, mais un simple philologue. Je veux dire simplement que le terrorisme n'est pas un crime ordinaire. Terroriser pour se faire entendre, pour faire aboutir ses propres intentions politiques se pratique toujours, de tout temps. Comme organisation, le phénomène existe depuis l'époque des croisades. Malheureusement, le terrorisme est toujours dans beaucoup de pays une méthode de gouvernement.

Au Japon comme ailleurs, il y a des gens qui croient que sans prospérité accompagnée de sécurité, la démocratie n'a pas de sens. Mais c'est faux. La vérité est : pas de démocratie, pas de prospérité. La prospérité et la démocratie vont ensemble. La confiance mutuelle est la meilleure garantie de la sécurité. Je suis

contre le fichage biométrique qui est une pure expression de la méfiance.

D'une interview (YouTube : Susumu Kudo) 2008 janvier

26) 「とりが鳴く…」

生まれ育った町のことばのことをむかし書いたものが最近見つかった。「故郷のことば」と題したものを消し、「とりが鳴く…」と直してある。「とりが鳴く」は「東（あづま）」の枕詞である。北東北のわれわれの言葉は中央の人には域外の間人（バルバロイ）の言葉でわかりにくく、「とりが鳴く」ように聞こえるのだろうと想像していたらしい。奈良時代の中央からみた東国（アヅマ）は、おそらく伊勢、美濃、三河、尾張以東だろう。アヅマの語源は、日本武尊（ヤマトタケル）の、弟橘姫をしのいでの「吾妻ハヤ」という伝説ほか、諸説あるようだが、「サ・つま（そこの端＝薩摩）」と「ア・つま（あそこの端）」が対をなし、王権の版図の両端を構成していたという西郷信綱（『古代の声』朝日選書）の説は、当時の大和からの視点を示したものとしておもしろい。東北では自分の地方を自らアヅマとは言わない。鹿児島では東さんはヒガシさんであり、アヅマさんは珍しい。「東（アヅマ）」は中央からの命名である。

三省堂の『時代別国語大辞典 上代編』（初版昭和 42 年）は、枕詞「とりが鳴く」のかかり方についてつぎのように説明している。「東国（アヅマ）にかかると、かかり方未詳。鶏が鳴くぞ、起きよ吾夫（アヅマ）の意とも、鶏が鳴くと東より白みそめるからとも、東国のことばは中央の人には鳥の鳴くように聞こえたのであろうともいわれる。」この最後の説は『日本語の起源』（旧版）で広く知られた大野晋の「とりが鳴く」説を踏襲している。

三省堂の辞書の 5 年後に出版された小学館の『日本国語大辞典』（旧版、『大辞典』と略称）の定義はつぎのようなものである。「『あづま』にかかる。かかり方未詳。（補注）かかり方については諸説ある。（1）東国のことばが中央の人たちには解しがたく、鳥のさえずりのように思われたところから。（2）「鶏が鳴く、やよ起きよ、吾が夫（つま）」の意で吾夫（あづま）から東国の意にかかる。（3）鶏が鳴いて東方から夜が白みそめるからかかる。（4）夜が明る意で「あ」に続くとか、あるいは、鳥の鳴き声を「あ」と聞いたところからなど。」

三省堂の辞書で諸説の最後に、さりげなく伝聞調で載せられていた「東国こ

とば=鳥ことば説」が、『大辞典』では（補注）の冒頭に格上げされ、断定されている。この説は、比較的最近の『角川古語大辞典』でも、小学館の『古語大辞典』でも第一の説として載っている。

講談社の『古語辞典』では、「東国のことばが解しがたく、鶏が鳴くように聞こえたことから」は「一説」である。『新潮国語辞典 現代語・古語』（初版、第二版）、角川の『全訳古語辞典』、三省堂の『例解古語辞典』、『広辞苑』などには「東国ことば = 鳥ことば」説はない。このなかで『岩波古語辞典』の記述は突出し、この説だけを特立させてこう断定している。「地名『あづま』にかかる。東国のことばがわかりにくく、鶏が鳴くように聞こえたことから。」

鳥と鶏はちがうなどと言うつもりはない。しかしなぜ一説にすぎなかったものがこのように断定されてしまうのだろうか。万葉集では「鶏鳴」を「トリガナク」と読んでいる例が3例、「(あかときと)カケ(鶏)ハ鳴ク」1例。漢詩(詩経)風「アカツキ(暁)」1例が105歌にある。「鶏鳴」をアカトキと読む例は「書紀」(巻26)の斉明紀7年の記述のなかにもある。昭和16年発行、中央公論社版『萬葉辞典』(佐佐木信綱編)の、「とりがなく」の項はあきらかに「鶏鳴」=「(暁に)鶏が鳴く」を前提にしている。

「鳥が鳴く(枕詞)あづま。(解釈)暁に鶏が鳴く意。續柄未詳。(諸説)(1)鶏は夜のあか時になくので明にいひかく(万葉考 賀茂真淵)。(2)鴉のなく音のああと聞こゆるを以てつづく(冠辞考續貂 上田秋成)。(3)鶏が鳴く故に吾夫起きよとの意より東国にかける(万葉集古義 鹿持雅澄)等」。

ここには契沖の「暁ニ鳥鳴テコソハ日出ル事ナレ」(万葉代匠記)はない。正宗敦夫『萬葉集総索引』によれば「とりがなく」は9例あり、『萬葉辞典』には、そのうち、2例(199、382)が載る。この昭和16年刊の『萬葉辞典』に契沖以外の諸説を載せているが、東国ことば=鳥ことば、と思われる説はない。(2)の秋成の考えは、鴉(!)の鳴き声の「あ」がアヅマの「あ」につながると言っているのである。

秋田に長逗留した三河の文人、菅江真澄は秋田県鹿角郡の私の町(当時は村)を数回訪れた。最初の天明5年(真澄32歳)、二度目の文化4年(同54歳)

の様子を『遊覧記』のなかにくわしく語っている。しかしどちらの記述も、他の北東北の巡村同様、言葉がわからなくて苦労した、などということをしこしこも感じさせない。幕末の北蝦夷探検家、松浦武四郎（今の三重県の人）も私の母の村でもてなしを受け一泊している。村人はこの珍しい伊勢からの客人を宿舎に拝みに行き、宿舎の主人は宿泊代をがんとしてうけとらないのに困りはてた武四郎は持参の菓を贈呈している。彼が「とりが鳴くような」かれらの言葉を解さなかった様子はまったくくない。アイヌ語が混じりながらも古日本語が生きていた江戸時代の東北の北端にしてこうした状態である。その千年前、北東北よりはるかに西南寄りに位置する万葉時代の「東国」の言葉が、当時の中央の人に「わかりにくく、鶏が鳴くように聞こえた」のであろうか。江戸のすぐ外からやってきた田舎者を「むくどり」とばかにしたのは、東国の首府、江戸の町人である。

「とりが鳴く…」という美しい枕詞を狭隘な場に位置させたくないのである。日本語全体についても同じことである。その起源を無理に狭い地域に収斂させようとする試みには抵抗したい。「日本語の起源」の謎解きは、専門の者も専門外の者もすべて、日本語体験を通じて参加できるロマンの宝庫である。

この比較論にはおそらく、いろいろな誤り、無知のあらわれがあるに違いないが、日本列島の縄文時代前期の言語と、中央アジアまで来ていた印欧祖語とは通底していた、という私の確信は変わらない。 05年（とり年）。

これは2005年、五月一日発売の「日本語はどこから生まれたか」（ベスト新書）の「あと書き」として書いたものです。

27) 日本語の起源とその豊饒 - 印欧語との相似を考える
「とりが鳴く…」

私の家の、道をへだててすぐのところに古い幼稚園がある。以前はこの幼稚園に朝のまだ暗いうちから鳴く鶏がいて、そのかん高い声によく起された。秋田県北部の片田舎に育った私は朝の鶏の声をよく聞いたはずだが、鶏は夜明けではなく夜のうちに鳴くものだという事は知らなかった。

万葉集、柿本人麿作歌中に、「東（アヅマ）」にかかる「鶏鳴（とりが鳴く）」（2-199）という枕詞がある。正宗敦夫、『萬葉総索引』ではこの枕詞は九例。その解釈は、『萬葉辞典』（昭和16年、佐々木信綱編）によれば、「暁に鳥が鳴く意。續柄未詳。（諸説）（1）鶏は夜のあか時になくので明（アカ）にいひかく（賀茂真淵）。（2）鴉のなく音のああと聞こゆるを以てつづく（上田秋成）。（3）鶏が鳴く故に吾夫起きよとの意より東国にかける（鹿持雅澄）等」といったものだったが、「アヅマの言語が、鶏の鳴くように聞こえるというところから起つたものに相違ない」（大野晋）という説も現われ、現在、岩波古語辞典は「地名『あづま』にかかる。東国のことばがわかりにくく、鶏が鳴くように聞こえたことから」と定義している。この枕詞については拙著『日本語はどこから生まれたか』（ベスト新書）で述べたが、別の観点から考えてみよう。

「鶏鳴」を「とりが鳴く」と読むのは、万葉集に「等里我奈久」（18 - 4131）、「登利我奈久」（20 - 4331）などと音仮名表記があるからだ。4131歌は、越中アヅマに赴任している家持に越前在の相伴池主が送った戯歌の一つだが、もしかしたらアヅマをばかにしているのかもしれない。しかし一般に「鶏鳴」は、「とりの鳴く」、「とりは鳴く」、「とり鳴く」とも読めるだろう。「鳴くとりの（アヅマ）」という言い方もおかしくはない。「カケ（鶏）は鳴く」と読まれる例（11-2800）もある。2-105歌では、「鶏鳴」を「あかつき（暁）」と読む。助詞のガは私見では助詞ナの転じたものであり、少なくとも「とりノ鳴く」よりは新しいのだが、この枕詞はなぜいつも「とりガ鳴く」とだけ読まれ、その意味が「東国のことばがわかりにくく、鶏が鳴くように聞こえる」というのだろうか？

たしかに大野晋の言う通り、「古代の人は、自分の分からない言葉に対して、しばしば、鳥がさえずるようだとか、モズが鳴くようだとかいう比喻を用いた」ことはある。「鳥語」は後漢書にあり、「駘舌（ゲキゼツ）」という表現は孟子がすでに用いた。しかし、盛唐の詩人、岑参（シンジン）の一句に「鷄鳴紫陌曙光寒」（鷄は紫陌に鳴いて曙光寒く）があり、さらに中国詩の始まり『詩経』には「鷄鳴」という言い方がすでにあつた。齊風に「鷄鳴」と題され、冒頭が「鷄すでに鳴きぬ」（夜が明けた）で始まるものが一つ、鄭風に「(女曰) 鷄鳴」（女いわく）「とり鳴けり」（朝だ）がある。これらの「鷄鳴」は、曙光前の一瞬を指しているのもであつて、東国人言葉云々、という含意はまったくない。あかつきが東に通じるのは極地を除き世界共通である。柿本人麿はこうした漢詩の通釈を知っていてこの枕詞を作ったのではないか。

ヴェーダ・サンスクリットでは雄鷄を *usâ-kala*（ウシャカラ）と言う。*usâh* は「あかつき」という意味であり、語源的にギリシャ語の *eôs*（暁、東方）、ラテン語の *aurora*（暁、東方）、さらに英仏語の *east, est*（東）につながる。「朝（アサ）」はこの *usâh* に似ているが語源は定まっていない。*kala* はギリシャ語動詞 *kaléo*（呼ぶ）につながり、*usâ-kala* は「暁を呼ぶ（鳥）」である。フランス語で「曙光前の一瞬のくらやみ」は *au chant du coq* または *au coq chantant*（とりが鳴く時）。昔よく使われたというこの古い田舎風の言い方はまさに『詩経』の「鷄鳴」である。

三千年以上前の中国、印欧語世界でも「東」を喚起する「とりが鳴く」という美しい表現は日本では奇妙な色彩を帯びてしまった。地方赴任したらできるだけ早く都に戻ることを願った官吏、地方は例外なく中央に憧れを持っていると信じ込んでいた都人、**征夷**大將軍という用語に何の疑問も抱かず、蝦夷・アイヌは土人と考えた学者。縄文時代の大言語、アイヌ語はこのような環境で生き延びることはできなかつた。ユーラシア語を通じ印欧語に通底していた日本語の起源研究はこうしたものを乗り越えねばならない。

『21世紀フォーラム』100号。政策科学研究所、2005年12月

28) *La construction de l'abattoir public de Limoges au début du XIX^e siècle* de **Takashi Yasukawa** et *La maîtrise des bouchers du Château de Limoges (1630 - 1828)* de **Jean Levet**

L'auteur du présent article, Takashi Yasukawa, est un jeune admirateur japonais de M. Jean Levet, historien, qui « sait tout sur la ville (de Limoges) » (*Le Populaire du Centre*). Intéressé à l'Histoire de France et initié, par un livre de ce dernier « *Mille ans rue Torte. Petite histoire de Messieurs les Bouchers de Limoges* » (éd. Renaissance du Vieux Limoges), à l'histoire de la rue de la Boucherie, il passe sa seconde année d'études universitaires (en premier cycle de doctorat) dans cette bonne ville, longtemps connue au Japon de son élégante porcelaine.

C'est son mémoire de maîtrise, intitulé « La construction de l'abattoir public de Limoges au début du XIX^e siècle » dont nous venons d'en reproduire ici l'extrait. M. Jean Levet n'avait presque pas eu le temps d'en lire le manuscrit, heureusement inspiré par son propre livre. Il est décédé l'année dernière en février, à l'âge de 86 ans.

Dans la méthode, le jeune chercheur japonais a suivi le savant limougeaud : il a puisé aux sources, en se référant tout le temps aux Archives Départementales de la Haute-Vienne (abr. ADHV). Sa description se concentre aux conjonctures historiques et économiques de la construction de l'abattoir public à Limoges (1833), point tournant du vieux vers le nouveau Limoges

M. Michel Toulet, successeur de M. Jean Levet et nouveau président de l'Association de la Renaissance du vieux Limoges, a voulu publier des manuscrits laissés de M. Jean Levet. Il en a fait un très beau livre « *La Maîtrise des Bouchers du Château de Limoges (1630 - 1828)* » qui vient d'être édité fin février.

Le savant limougeaud nous renseigne non seulement sur la rue de la Boucherie (l'ancienne rue Torte) mais sur les gens qui l'habitaient, leur coutume, leur lutte pour la vie, la création de la corporation des bouchers, leur fameuse

confrérie consacrée à la Chapelle de St. Aurélien, le marché de la Motte, la fontaine d'Eygoulène dont l'eau lavait les boutiques et la rue. L'historique de la rue de la Boucherie s'arrête juste avant la construction de l'abattoir. C'est notre chercheur japonais qui le relaie.

Ce qui se raconte dans la deuxième partie du livre de M. Jean Levet concerne surtout la vie familiale des bouchers, leurs relations avec l'administration municipale, le mariage ou la structure de la rue et de la boutique. Ce qui nous frappe et nous impressionne dans ce livre est son immense amour pour la ville de Limoges et pour tout ce qui la concerne à travers le temps. J'envie mon illustre ami Jean-Pierre Levet dont le vénérable père était un véritable homme de passion qui ne cesse de nous captiver.

Tôzai 9, octobre 2007

29) MORIYAMA (Kôsuke), *Journal de lecture de l'Iliade*, Yokohama, Shumpûsha, 2005, 445 p.

Ikuta Yasuo, de son véritable nom, qui était un des responsables de la compagnie aérienne japonaise JAL, est l'auteur de ce livre extraordinaire. Depuis plusieurs années, il s'impose chaque année une lecture complète des vingt-quatre chants de *Iliadei*. Deux chants par mois : ce qui revient à lire un chant par quinzaine : une cinquantaine de vers environ par jour, dit-il en riant. Il y consacre surtout le dimanche.

Au cours d'une de ses lectures habituelles et annuelles de *Iliade*, il a commencé à prendre, dans son journal, des notes non seulement sur des faits divers quotidiens, mais sur ses idées littéraires, grammaticales, prosodiques ou métriques concernant l'œuvre homérique. C'est un travail à la fois d'un dilettante et d'un vrai exégète. Il ne cherche pas à forcer de nouvelles interprétations ni à se glorifier de ses petites bonnes idées charmantes. Il suit avec beaucoup de simplicité et de scrupule le cours naturel de sa curiosité, toujours en lien, d'une certaine façon, avec sa vie réelle : conversations autour d'un pot avec ses collègues, visites fréquentes à sa mère hospitalisée, changements de saison reflétés dans les fleurs, dans les arbres ou dans l'eau etc.

Le lecteur aura certainement une sorte de vertige en découvrant des points communs, consonances, voire, consanguinités qui émergent des soucis des héros homériques et des préoccupations des samouraïs de l'entreprise japonaise moderne. On voit avec stupeur que le monde homérique n'est toujours pas clos, mais encore ouvert, vivant, continuant de nous faire beaucoup imaginer, réfléchir. Il continue d'enrichir l'humanité entière.

Ce sont principalement ces notes nées d'une lecture annuelle (celle de l'année 2003?) qui constituent la grande trame du livre, agrémentée par ses observations diverses de la vie quotidienne : réflexions sur son dada : haïkus (courte poésie de dix-sept syllabes, très populaire au Japon) et sur tout ce qui attire son attention

dans la nature et dans la société où il vit. Une de ses grandes préoccupations concerne les étapes de convalescence de sa vieille mère qui vient de se faire opérer dans un hôpital.

Dans le livre, elle est alitée, d'abord inerte et sans conscience, dans une chambre d'hôpital qu'il visite régulièrement. Le fils est debout avec angoisse devant les états fluctuants de sa mère après l'opération. Les fluctuations de la convalescence coïncident curieusement avec les scènes de combat féroce d'Hector, tueur d'hommes, en profitant de l'absence d'Achille, et avec les lamentations du vieux roi Priam anticipant la destruction prochaine de Troie.

Ces divers éléments, homériques et quotidiens, sans rapport entre eux au début, superposés les uns sur les autres, insolites, se révèlent, au fur et à mesure, des unités harmonieuses qui font de ce journal original une œuvre littéraire authentique et de résonance musicale toute particulière.

L'auteur continue de noter et de commenter avec une régularité extraordinaire : il ne se passe pas un seul jour sans qu'il ne lise une cinquantaine de vers de *Illiade* et qu'il ne laisse, dans ses brouillons, de ses amples idées et imaginations. Il se régale comme il digère lentement quelque chose d'extrêmement délicieux.

Ses phrases sont d'une élégance sans égale. L'auteur, versé dans les vieux poèmes japonais *Mannyôshû*, l'est aussi dans le roman de Proust. Nous* nous réjouissons ainsi d'avoir parmi nous un véritable homme de lettres moderne.

Tôzai 9, octobre 2007

* le cercle de lecture homérique depuis l'année 1983, à Meijigakuin, Tokyo, dont je fais partie dès la première année. Après *Illiade*, nous en sommes maintenant (mai

2007) au chant 18 de l'Odyssee.

書籍紹介：(項目29の日本語訳)

『イーリアス』日記

森山康介著

横浜・春風社、2005年刊。445頁

この非凡な書の著者（本名生田康夫）は日本航空の要職にありながら、数年に亘って毎年『イーリアス』全24巻を通読することを習慣としてきた。毎月2巻、ということは半月に1巻、すなわち毎日約50行ということです、と笑いながら彼はいう。日曜日はもちろんのことだ。

このような習慣となった毎年の『イーリアス』読書の流れの中で、彼はその日記に日々の身近雑記のみならずホメーロスの作品にかかわる文学的、文法的、韻律・詩法的考察を書き記しはじめた。それはダイレタントの仕事であると同時に真の註釈家の仕事である。著者は新しい解釈を強いることはしない。そのささやかで、興味深い、魅力的な考察を誇ることもしない。彼は実に素直に謙虚に自分の興味の流りに従っているのだが、その流れは常になんらかの仕方で実生活（同僚との会食での雑談、入院中の老母の見舞い、花や木や水に映る四季の移ろい、などなど）とつながっている。

読者はホメーロスの英雄の苦しみと現代日本企業のサムライの気懸かりとの間に、共通点、共鳴、さらには**血のつながり**さえ見出して一種の眩暈を覚えるにちがいない。ホメーロスの世界は決して閉じられているのではなく、開かれ、生き続け、私たちの多くのことを想像させ考えさせていることに気づいて驚くのである。

本書で主脈をなすのは1年間（2003年？）の読書から生まれた**こうした**覚書である。その主脈は日々の生活の中でのさまざまな考察によって豊かにされている。すなわち、著者の趣味である俳句（日本固有の17音よりなる短詩）や彼が生きている自然や社会で注意を引かれたすべてのことについての考察である。中でも彼の大きな気懸かりひとつが手術を受けたばかりの老母の状態の変化である。

本書において、老母は当初無意識状態で病室のベッドに力なく伏している。そこを規則的に見舞う息子は老母の術後の状態の変転を前に不安げに立つ。不思議なことに、病状の変転はアキレウスの不在に乗じたヘクトールの勇猛な戦

いや、トロイア陥落を予期したプリアモスの嘆きと暗合している。

ホメーロスの諸要素と日常的諸要素、この当初無関係であったものが相互に重なり合い、徐々に調和した統一体を成すに至る。そのことがこの独創的な書をして独特の音楽的共鳴に満ちた真正の文芸作品たらしめている。

著者は驚くべき規則正しさをもって註釈を続けていく。50行程の『イーリアス』を読まない日、そして草稿に考察と思いのたけを記さない日は1日としてない。彼は極め付けのご馳走である何ものかをゆっくりと反芻しながら味わっているのである。

彼の文章は類まれな優雅さを備えている。この著者は、**日本上代の和歌集『万葉集』**にも親しむと同時にプルーストの小説にも親しんでいる人である。このような現代の真の文人を仲間（*）としていることは私たちの**大きな**喜びである。

『東西』9号、2007年10月

（*）：「ホメーロス輪読会」1983年～、東京・明治学院大学。私（工藤）は初年度からのメンバー。2007年5月現在『イーリアス』を終え、『オデュッセイ

ア』第18巻進行中。この書評は年刊誌『東西 TOZAI』9号（2007年刊）所収